

非思想非非思想天

vol.12



京都大学哲学研究会会誌 非思想非非思想天 第十二号

やさしい哲学史

つかさ 04

デカルトは正しいか

武田宙大 32

哲学的航海

なご 34

中動態がきこえる

村山洋 36

比較言語学による言語哲学の序説

やさしい哲学史

——デカルトからヘーゲルまで——

つかさ

君たちの論文はなるほど大そうおくふかく、そこ知れんほどおくふかく、大そう意味ふかく、びつくりするほど意味ふかくはあるけれども、またびつくりするほどわけがわからないのだ。開ける鍵がない、閉められた米倉は人民には何になるうか？人民は知識にうえている。そして一きれの心のかてを無邪気にわけあつて食べようとする私にお礼をいつてくれるのだ。(ハイネ『ドイツ古典哲学の本質』)

たいていの哲学史は読んでいてつまらないし、頭に入っていない。書いてあるのは「この哲学者はこういう思想だった」の羅列のみで、その内容も哲学者同士の相互関係も全く分からないからだ。

つまらない哲学史しかないのは、それを書いているのが学者だからである。哲学史上で、ある哲学者が他の哲学者をボロクソに言っていたとしても、それをそのまま記述することはできない。ボロクソに言われている哲学者を研究している、知り合いの学者がいるからだ。同じ業界の仲間には配慮する必要があるし、自分の専門外の哲学者を下手に批判して痛い目にあってもかわない。哲学者間に優劣を付けず「いろんな思想の人がいたよ」と言う以上

のことはできないのだ。あとは、用語説明をしたり、エピソードを紹介したりして紙面を稼ぐくらいだ。「この哲学者なんて読む価値ないよ」「この著作以外糞だよ」などと思っても言えるはずがない。結果、無難で凡庸なつまらない哲学史が量産されるわけである。

「やさしい哲学史」を書いている私は学者ではないし、配慮すべき同僚も存在しない。だから、自分がこれまで研究し、思っていることを正直に書くと思う。本書が読者の哲学史理解の一助になれば幸いである。

- 第一章 デカルト(1596年～1650年)
- 第二章 デカルト後の三つの潮流
- 第三章 ライプニッツ(1646年～1716年)
- 第四章 スピノザ(1632年～1677年)
- 第五章 認識論(ロック、ライプニッツ)
- 第六章 ヒューム(1711年～1776年)
- 第七章 カント(1724年～1804年)
- 第八章 カント哲学の分析
- 第九章 ヘーゲル(1770年～1831年)

デカルト（1596年～1650年）

デカルトは、近世以降において最も重要な哲学者である。

それは、真理に到達する方法を見出し、それによって自由意志の問題に一つの解決を与えたからである。

総合的方法

総合は逆に、正反対の、いわばア・ポステリオリに問われた途によって、なるほど明晰に、結論されたところのものを論証するものであつて、定義、要請、公理、定理、および問題の長い連鎖を使用します。が、それは、帰結のうちの何かがこの総合に対して否定されることがあるとするならば、そのものが先行理由のうちに含まれているということをただちに示さんがため、そしてこのようにして読者から、彼がどれほど敵対的であつても頑迷であつても、同意をもぎとらんがため、なのではあります。が、これは、分析のように、学び知りたいと願う心を満たし鎮めるものではなく、それというのも、事物が見つけ出されたその仕方を教えることが無いからです。（『省察』第二答弁）

日常生活を営むにあたって、他人と何かの衝突が起きて、議論をする必要が生じることがある。その際、相手と確実に一致する方法は果たしてあるだろうか？相手はそっかしくて、話の半分だけ聞いて返答し、議論を横道にそらしてくるかもしれない。相手が敵対的である場合、関係のないことを言

つたり、揚げ足を取ったりしてくるかもしれない。それらへの対処法は存在するだろうか？デカルトは、あると考える。それが、総合的方法である。

デカルトは、相手の用いる言葉と、相手が認めている原理のみを用いて論証を行えば、一致を取ることができると考える。最初に、相手の使う言葉と理論を確認する。そしてその後は、それらのみを用い、一々相手の同意を取りながら、漸次的に一致点を増やしていく。そうすれば、相手は議論を否定する時の常套手段を封じられ、同意するしかなくなるのである。

「君の言葉の使い方はおかしくないか？私はそれを違う意味で使っている」↓「いや、僕は君の使った言葉しか使っていないし、それについては既に一致しているはずだが？それとも、君が一致した時何を言っていたか、繰り返してあげようか？」

「論理的な飛躍があるのでは？」「それは極論ではないかね」↓「僕らは漸次的に一致点を積み上げてきたし、君もそれについて一々同意していたはずだが？不一致があるというのなら、一体どの段階でそれが生じたのか言ってくれないか？」

このように、すでに自分が同意したことは否定できない、ということを利用するのだ。相手が同意したことのみを使うという立場をひたすら堅持し、それを議論の中心に置き続けることで、相手がどれほど敵対的で頑迷であっても、同意の奪取は可能になるのである。

懐疑論者を殺す方法

デカルトは、この総合的方法を懐疑論者に用いる。まず、感覚について疑い、ついで身体について疑い、数学について疑う。懐疑論者の懐疑を、懐疑論者よりも徹底した形で行うわけだ（哲学史上では、普遍懐疑あるいは誇張懐疑と呼ばれる）。

- 日常的な感覚に基づく判断↓遠くから見て丸い塔が、近くで見ると四角かったりするように、しばしば誤るから真ではない
- 内的身体的感覚。服を着ている、紙を手をしている、この手、身体全体が私のものであるという意識↓夢においても、その意識が生じることがある。したがって真ではない
- 数学的真理。 $2+3=5$ は夢のなかであろうと真ではないか↓我々がそれらの計算をするたびに、神が欺いているかもしれない。したがって真ではない

こうして、実際に懐疑を一つ一つ行っていく中で、あることが明らかになる。それは、懐疑の際に我々が実際にしている行為は「ある主張を否定する別の事例を想起すること」だということである。

日常的な感覚にはそれを否定する経験を、身体的感覚には夢を、数学的真理には欺く神を、一々対置することで、それを疑わしい、と言うことができるのだ。これは逆に言えば、そのような事例を想起できないものについては、真であると認めているということになる。今まで、懐疑を普遍的で、何にでも適用可能なものだとしてきたのは間違いだった。その普遍性は、実際に行

っている行為を曖昧にすることで、不当に認められてきたものにすぎないのである。

例えば君が懐疑論者として、この議論はどのように映るのかを考えてみよう。

デカルト「遠くから見たら四角い塔が、近くにいったら実は丸かったということがあるだろう。したがって感覚器官は信用できないのだ」

懐疑論者「そのとおりだ」

デカルト「身体感覚については君は確かだと思うかもしれない。だが、君は夢を見ることがあるだろう。そこにおいて、それが間違いだという経験をしたことがあるはずだ」

懐疑論者「そのとおりだ」

デカルト「数学的真理、例えば $2+3=5$ というのは夢でも疑えないと思うかもしれない。しかし、欺く神というものを想定してみよう。そして私が計算するたびに間違いさせているとしよう。こうしたら、数学的真理も疑わしいと言えるのではないか」

懐疑論者「君もなかなかやるね、デカルト君！」

このように、しつこく実例を積み上げたうえで、デカルトはいよいよ次の段階へ行く。

デカルト「さて、今までの例からも分かるように、懐疑という行為が実際に意味しているのは、その反対物を想起する、ということになるのではないか。それとも君は、そうでない懐疑をしたことがあるかね」

懐疑論者「……」

デカルト「ならばそれは、その反対物を想起できないもの、経験したことの無いものについては、真だと認めているということではないかね。君が行っている懐疑というのは、何にでも通用する第一原理などでは決してない。ただその使用に際して注意を払っていなかったから、そう思い込んでいただけにすぎないのでは」

懐疑論者「……」

最初に懐疑を一々丁寧に行ったのは、相手の同意を得て、逃げ道をなくすためだったのだ。そして最後に、我の存在が確かなものであるという同意を、懐疑論者から奪取する。

デカルト「では、考えている限りにおいての我、について考えてみよう。それを否定するようなものを、今まで君は経験したことがあるか。欺く神のような想定でもいいよ。それを想定できたのならそれが何かを言ってくれ。それができないのなら、君は、先に同意したことに基づき、それが真だと認めていることになるね」

今まで懐疑論者は、懐疑を最も根本的な行為だと考えてきた。だが、デカルトによって「疑うということ、反対概念を想起することですよね。では、考える我について、あなたはそれを否定するような経験を何かしたことがあるんですか？疑うというなら、具体的に反対概念として何を考えているか教えてくださいよ。実は口だけじゃないんですか？」と問われることになったわけだ。

この成果は、二つにまとめることができる。一つが明晰判明の規則であり、一つが我の存在の確実性である。

明晰判明の規則

私がこのように明晰に判明に認知する事がらが偽である、というようなことが一度でも起こりうるとするなら、もちろんそういう認知は私に真理を確信させるには十分でないことになるであろう。それゆえ、いまや私は、私がきわめて明晰に判明に認知するところのものはすべて真であるということ、一般的な規則として確立することができるように思われる。『省察』

これまでは、「何に対しても疑える」ことが、最も根本的な原理だと思われていた。それに代わって、「その反対を想起できないものは真である」が、より根本的な原理であると明らかにになった。それをデカルトは、明晰判明の規則と呼んだ、ということである。

コギト・エルゴ・スム

「私はある、私は存在する」というこの命題は、私がこれをいいあらわすたびごとに、あるいは、精神によってとらえるたびごとに、必然的に真である（『省察』）

存在を疑うことができないもの、それを否定する根拠を想定できないもの

として、実際に見いだしたのが我の存在である。これについては、その非存在を考えることができない。難しい言葉で言う、存在と本質とを切り離して考えることができないのである。このような存在は、実体と呼ばれる。

神の存在証明

ここまでで話が終われば非常にすっきりするのだが、そうはいかない。何故かと言うと、以上の議論は決定論に行き着くからである。自由意志を擁護したいデカルトにとって、それはまずいのだ。

実体概念について理解したならすぐに、我を取り巻く自然全体も実体なのではないかと考えることになる。これについても、それが否定される機会を想定できないように見える。先の議論との整合性から、これも実体（物的実体と呼ばれる）だと認めなければならぬだろう。さらにこれは、物的実体と精神的実体との関係性の話に及ぶだろう。精神作用も自由意志も、本当は自然全体のうちに含まれるのではないか。精神の原因を辿っていけば、それは自然全体によって生み出された、という結論に至るのではないか。精神は、ここにおける因果連鎖の内実について不明だったから、独自の原理であるように見えたにすぎないのではないか。だったら君が先に証明した精神の実体性は嘘だったということになるのではないかと。そこでデカルトは先手を打ち、神を持ち出して、この議論を潰そうとする。

この問題の核心は、精神的実体と物的実体の併存が矛盾であること、である。ならば、それらより上位の実体が存在し、両者を産み出したという想定をすれば、この問題は解決するのではないか。両者を産出した実体が、両者のバランスを取っていると考えれば、両者の併存は可能になるのではない

か。こういった発想をするわけである。

自然が実体であることは否定できない。通常であれば、自然に精神が含まれることになるだろう。だが、精神が実体であることは否定したくない。そこで、この両者がともに実体であるということ、そして自然に精神が含まれているように見えるということは認めた上で、「でもね、そう見えるかもしれないけど実はそれはそう見えるだけなんだよ」という仕方で解決を図っているのだ。こうすることで、自然の実体性について認めながらも、精神に実体性を認めることが可能になる。逆に言えば、この方法以外では、実体概念に到達した以上、精神に実体性を認めることは不可能だということである。

心身二元論

そして私は、両親とか、神ほど完全ではない何か他の原因によって、生み出されたのかもしれない。いな、けっしてそうではないのである。すでに前に述べたように、原因のうちには結果のうちにあるのと少なくとも同じだけのものがなければならぬことは明かである。そしてこのゆえに、現に私は考えるものであり、私のうちに神のある観念を有するものであるから、私の原因として結局、どのようなものがわりあてられるとしても、それはまた考えるものであり、私が神に帰するすべての完全性を有するものである、と認めなくてはならないのである。（『省察』）

神の存在証明の鍵となるのが、心身の区別の強調である。

自然からは精神のような精妙なものが生じ得るわけがないし、両者が全く

別物であると、強力に主張する。すると、通常の図式である

- 私の存在は不完全である↓自然全体が原因であり、私はその一部である。

が成り立たなくなるわけである。そして、

- 私の存在は不完全である↓だがその原因は自然ではない↓その原因として、自然とは別の上位の実体である神が存在する

となるわけだ。こうして、神が存在し、それが精神と物体とを生み出したという主張になるわけである。

デカルト後の三つの潮流

デカルトから、三つの潮流が生じる。

モナド論

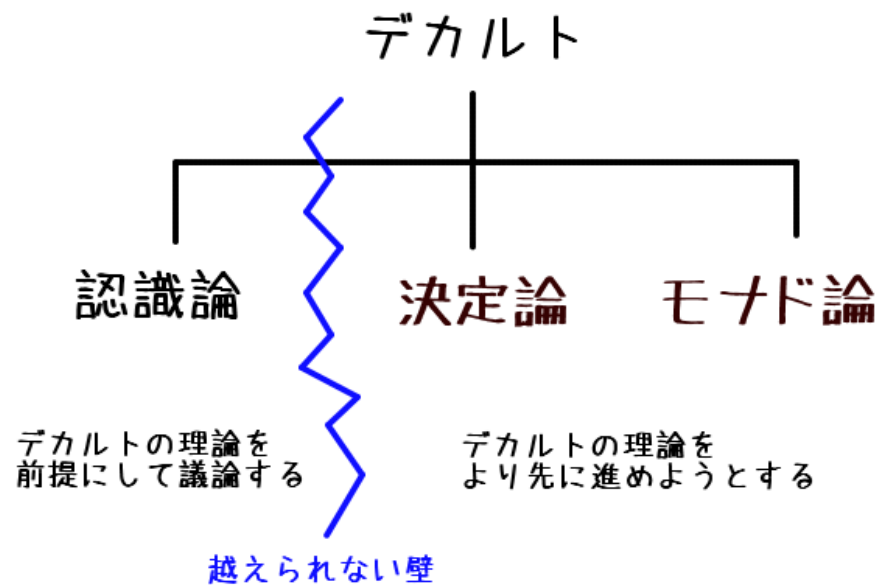
一つが、デカルトの理論をそのまま引き継ぎ、それを推し進める潮流である。ライプニッツがこれを行う。

決定論

もう一つが、デカルトの二元論を否定する潮流である。デカルトの用いた方法論を使い、デカルトの結論を乗り越えようという試みがなされる。これを行うのがスピノザであり、デカルトを否定し、決定論に行きつく。

認識論

三つめが、デカルトの理論をそのまま受け入れて、その枠内での議論をしようという潮流である。精神と物体間の関係や、我々の認識が具体的にどのようなように成り立っているのかを研究する。



ライプニッツ（1646年～1716年）

ライプニッツはデカルトの理論を受け継いで、それをより厳密なものにしようとした哲学者である。具体的には、精神が無数に存在することを認めた上で、デカルトの理論を発展しようとした。

デカルトの弱点

先のデカルトの議論には、不十分な点がある。それは、精神を一つしか想定していない点である。精神を保持する人間は、世界には多数存在する。この事実を無視し、デカルトは「神、精神、物体」の三つの相互関係しか考察していないのだ。

精神を複数認めることで生じる難問

だが、自己以外の精神を認めるとすると、さらなる難問に陥ることになる。まず、個々の精神間の関係性について説明する必要がある。個々の精神は、各々が独自の原理で動く実体である。だが、それにもかかわらず、それらは相互に関係し影響しあっている。これはどう説明されるのか。

また、死後の精神についても考察する必要がある。死後、人間の精神はどこに行くのか。人間は日々多数死んでいく。死後にも精神が残るとしたなら、世界は精神でいっぱいになったりしないだろうか。また、人間は日々多数生まれる。その精神はどこから生じるのか。無から生じるのか、あるいは

それもまた別のどこから来るのだろうか。

それに、どの範囲のものにまで精神を認めるか、という問題も生じる。例えば動物には精神はあるのだろうか。植物はどうだろう。それらの間に境界というものはあるのだろうか。

モナドロジー

これらの難問に答えるために作られた仮説が、モナドロジーである。モナドロジーのポイントは大きく二点ある。

- 微小表象によって構成されるモナド
- 予定調和説

モナドと微小表象

モナド論の核心は、「微小表象によって精神の動きを説明しよう」という発想である。

表象とは、要はイメージのことである。目の前にコーヒーカップがあるとすればコーヒーカップの表象を、朝に食べたパンを思い出せばパンの表象を持つ、というように言えるわけだ。その表象には、明確に意識されるものから、曖昧にしか意識されないもの、さらには全く意識されないものといったように、種々の段階がある。我々人間はたいいてい明確な表象を持つが、そうでない場合もある。例えば寝起きでボーッとしているときには、曖昧な表象しか持っていないわけだ。さらには全く意識されない表象というものも存在

し、人間が無意識に行う行為の原因となっている。

この微小表象が集まり、精神が形成される。そして、個々の精神活動が生じる。我々が何かを見て、何かを感じたとしても、それは私の精神が能動的に生み出した結果ではない。逆なのだ。個々の表象が集まり、構成されるのが人間精神であって、人間精神が先にあるのではない。だから、今私が思い描いている表象は、実はわたしのものではなかったのかもしれない。それはもしかすれば、他の誰かが見る表象になったかもしれない。もしかすればその誰かは、人間ではなく、動物や植物である可能性だってあるのだ。ただ、それら個々の表象が何かの理由で集まり、形成されたのが、私の精神だというわけだ。

微小表象の想定をすれば、例えば死についても説明することができだろう。死とは、精神を構成する微小表象が非活性化した状態だと定義できる。生と死の間に明確な境目は存在せず、それは眠りの状態に近いものである。また、動物と人間の違いについても説明できるだろう。どちらも、微小表象によって成り立っているという点では同じである。ただ、動物は曖昧な表象しか持っていないという点が異なる。この区分はさらに、植物、無機物、その他にも適用されるだろう。また、どこから精神が生まれるのかだとか、死んだらそれはどこにいくのかだとか、世界に精神が増え過ぎたりしないかだとかの難問も解決されることになる。あるのは個々の微小表象のみで、それらは新たに創造されることも、滅亡することもない。ある精神が減じたとしても、それを構成していた微小表象は残り、それはまた別の精神を新たに形成するのである。

こうして形成される精神を、ライプニッツはモナドと呼ぶ。それが指し示す範囲は広く、人間精神以外も含む。モナドとはつまりは、精神的実体が微

小表象によって成り立っている、と仮定した場合の呼び名なのである。

微小表象というのは微小物質のアナロジーである。物質は、一見したところではわからないが、無数の微小物質によって構成されている。この微小物質の想定により、物質の複雑な運動を一樣に説明することが可能になる。これと同じ構図を精神に用いて、ライプニッツは微小表象の存在を仮定し、それで精神の運動を説明しようとしているわけだ。

予定調和説

もう一つのポイントが予定調和説である。神はモナドを創造したとき、同時にそれらの相互関係も考慮した。我々は、相互に影響を与えあっているように見えるかもしれないが、それは実は見せかけで、神がそう調整しているだけである、という説である。これにより、無数に存在する実体の相互関係がどうして可能か、という問題が解決されるわけである。

ライプニッツの教説

さて、以上によってデカルトの残した難問は解決した、とライプニッツは考えたわけだが、あなたは思うだろうか？ 哲研例会で『モナドロジー』を扱った時に出た意見は「この理論を信じられる人は幸せだろう」「新興宗教の教説みたいなもの」だった。微小表象によって精神の変化を説明するというのは、トリッキーで刺激的な発想ではあるが、それだけである。予定調和の理論は平々凡々なものではない。そりゃあ、神に最終的に投げて説明するくらいじゃないだろうね、と思うだけだ。

そのうえで、これがライプニッツの無能さによるとは私は思わない。デカルトの理論を徹底しようとすればこういう荒唐無稽なものになるのはしょうがないことであるし、デカルトが他我や他の精神の問題に踏み込まなかったのは、それを理論立てて説明することなど不可能だと知っていたからではないか、と思う。

スピノザ（1632年～1677年）

スピノザは、デカルトの方法論（総合的方法）で、デカルトの結論（二元論）を否定し、決定論を証明した哲学者である。

実体概念から決定論へ

スピノザは、先の実体概念に行き着いた後、決定論に至る。あるのは自然のみであり、精神はその一部ではない。精神が独自の原理であるかのように見えるのは、ただそれを動かしている原因について我々が無知であるからにすぎない、という理論だ。

その上でデカルトを批判しようとするのだが、その際スピノザは次のように考える。自身とデカルトとは、実体概念にたどり着いているという点では同じだが、そのあとが異なっている。自分は、自然が唯一の実体であり、精神はそのうちの一部ではない、それが実体であるかのように見えたのはただ単に、その内実について無知であるからだと考えている。それに対し、デカルトは、神が第一の実体で、そこから精神なり自然なりの実体が生じたのだ、という説をとっている。これはなぜなのか、と。スピノザは、実体概念についてデカルトが曖昧だからだ、と整理する。デカルトは実体という性質を神に認めながら、精神の実体性を保証するために、実体性とは矛盾する諸々の性質を神に帰している。だから自分とデカルトとの間に不一致が生じているのだ、と。

デカルトの武器でデカルトを殺す

デカルトの方法は、むしろこれと極めて異なったものでありまして、彼自らその方法を真実にして最善なる教授方法となし、これを「分析的方法」と名づけています。というのは、彼は「第二駁論への答弁」の終りのところで、不可疑的証明方法に二種類あることを認めております。一は分析的方法で、それは「対象を方法的に、そしていわばア・プリオリに発見する真の道を指し示す」ものであり、他は総合的方法で、それは「定義、要請、公理、定理及び問題の長い系列を用い、従ってそれは人がそのいずれかの結論を否認する場合、その結論が前提の中に含まれていることを直ちに示すことができ、このようにしてどんなに反抗的で強情な読者からも同意を奪取することができる」ものである（『デカルトの哲学原理』序）

ならば、デカルトが用いている神概念を批判し、それが自分の思う自然と実際は同じものであると示せば、デカルトを批判できることになる。デカルトは、実体概念について曖昧であるが故に、そこに諸々の矛盾する性質を帰した。ならば、その性質をいちいち批判し、取り去っていけばいい。そうすれば、最終的には自身の理論への同意を強制できるのだ。

そこで用いるのが、総合的方法である。スピノザは、デカルトが用いている神という語と、実体という原理を使って、デカルトに決定論の強制をはかる。スピノザは、まず実体概念について考察する。実体だということは、それが「ほかの実体を要しない」「独自の原理で動くものである」ということだとあなたは認めているだろう、と。ついで、神の定義を確認する。あなた

はそれが、第一の実体だと定義しているだろうと。そのうえで、デカルトが神に帰した「他の実体の産出」「実体の複数性」「上位の実体」といった諸々の性質と、実体概念とが矛盾しないかを一つずつ考察していく。

決定論の証明

神、あるいはおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている実体、は必然的に存在する。『エチカ』第一部定理11)

結果、神から「第一の実体である」以外の性質をすべて否定してしまう。神が第一の実体である、と主張した時点ですべては終わってしまうのだ。それと精神とはどう関係するか、といった問題はそもそも生じない。万物は神の内に含まれており、精神もそのうちの一部でしかない。存在する実体は神のみであり、他の実体はない。これは、神という語を使っているが、自然が唯一で精神はその一部であるという主張と実質的には同じだ。こうして決定論が証明されるのである。

スピノザは汎神論か？

教科書において、よくスピノザは汎神論者と紹介されているが、これは的外している。神が第一に存在する、と信じている者を対象に、総合的方法で決定論を説けば、「神」という語が残り、決定論の命題が汎神論的な表現になるというだけの話なのだ。字面だけを見て、そこに神秘主義だとか八百万の神のような思想だとかを見出すのは間違っているのである。

認識論（ロック、ライプニッツ）

それゆえ、私の目指すところは、人間の真知の起源と絶対確実性と範囲を研究し、あわせて信念・臆見・同意の根拠と程度を研究することである。したがって、現在のは心の物性的考察に立ち入らないだろう。すなわち、心の本質はどこに存するかとか、精気のどんな運動あるいは身体のような変化で、私たちはなにかの感覚を感官によって持つようになり、あるいはなにかの観念を知性に持つようになるかとか、また、この観念はその造られたるに当たって、そのどれかもしくは全部が物質に依存するかどうかとか、そうしたことの検討にわずらわされないだろう。（ロック『人間悟性論』）

ライプニッツとスピノザはデカルトと同じ次元で話をしているが、認識論は違う。認識論はデカルトの二元論を前提として受け入れたうえでの議論である。「二元論が真である場合、身体と精神はどのようにして関わって、認識をしているのか」を明らかにするのが認識論である。

認識論の系譜

認識論は、生得観念を認めるか否かで、二派に別れる。

- 生得観念を認める…観念論。ライプニッツ（1646年～1716年）
- 生得観念を認めない…経験論。ロック（1632年～1704年）

生得観念

生得観念とは、経験によらない観念のことである。例えば正義とか真だとか神だとか、だ。それらは、経験的に教えられることはない。だが、それらが何を意味するかについては各自が知っている。かつそれは、民族や宗教といった相違を超えて、すべての人類に共通しているように見える。よってそれは、生まれる以前から持っている観念なのだろう。このようにして、生得観念の存在を信じる人は、観念論の立場を取ることになる。

これを否定する人は、経験論の立場を取る。常識的に考えたなら、生得観念なんてあるわけないだろう、と考えるわけだ。

「真だとか正義とかいったって通用しない人がたくさんいるじゃないか」

「その観念ってどこで得るんだよ。生まれる前って、魂の存在を信じているのか？」

「あとどこでそれが刻印されるんだ？天国とでもいうのか？」

「天国なんてどこに存在してるんだよ」

というように。

観念論と経験論の違いは、対称的な二つの派閥があってそれぞれに言い分がある、と思うよりは、「普通に考えれば経験論になるところを、



生得観念なんてあるわけないだろ常識的に考えて…

心情的な問題から観念論者がかき乱している」ととらえたほうが正しい。経験論はものの見方の一つではなく「だつてそうだろ当たり前じゃないか」と表明しているに過ぎないのだ。「経験論者のロックがタブラ・ラサという理論を唱えた」とよく教科書では説明されているが、新しい理論を唱えたという捉え方は間違っているのである。

観念論者の意図

では観念論者はなぜ生得観念を擁護したいのかというと、それが自由意志の問題に関わってくるからである。全てが経験に起因するのだとしたら、私の本質が無くなるのではないか。私が違う場所にて違う経験をしたら、私は全く違う人間になっていたということか。だとすれば、自分が自分である根拠が一切なくなってしまうじゃないか……こういうことを考えて、経験論を批判するわけである。

ロック

まずは、ロックの主張から見ていこう。

生得観念の批判

いったい、知性にはいくつかの生得原理、ある原生思念、共通心念、いわば人間の心に捺印された文字があつて、靈魂はそもそも生まれる初めにこれを受け取つてこの世に携えてくるというのは、ある人々の間で

確立された説である。が、もし私が、人々は本来自然のいろいろな機能を使うだけで、すこしも生得の印銘（インプレッション）の助けを借りずに、人々の持ついつさいの真知へ到達でき、そういった本源的な思念ないし原理がなくとも絶対確実性へ到達できることを明示さえすれば、先入見にとらわれない読者は、そうした想定が虚偽であることを十分に納得するだろう。『人間悟性論』

人間の内には、普遍的で誰にも共通するような観念が存在するように見える。それに、誰にでも共通する道徳的な観念というものも存在するだろう。だから生得観念が存在するというのが、生得観念を支持する人たちの主張である。

これに対してロックは、そもそも全人類が普遍的に同意するような原理なんて一つもないだろ、と批判する。その例として、「有るものはすべて、有る」「或る事物が同時に有りかつ有らぬことは不可能である」という原理について取り上げる。

私は理論的原理から始めて、およそあるものはあると同じ事物があつてあらぬことはできないというあの堂々とした論証原理を例にとろう。これらの原理は、とりわけて生得の資格を最も許されると私は考える。しかも私は率直に言うが、これらの命題は普遍的に同意されるどころでなく、人類の多くの部分には知られさえしないのである。

なぜなら、第一、子どもや白痴は、明らかに、みんなこれらの原理をいささかも認知しないし、考えない。そして、認知されず考えられないことは、いつさいの生得原理に必ず伴わなければならない普遍的同意を

まったくなくしてしまうものである。『人間悟性論』

さらに、道徳的な生得観念については

- 悪いやつなんてそこらにいるし、正義や信義といったものが普遍的であるわけではない
- そもそも、それらが普遍的ならば、それが存在するかどうか問題になるわけではない

として否定する。

他に、神の概念すら民族によっては認められない場合があるのだから、生得観念なんてあるわけないだろ、という議論もする。

ライプニッツ

ライプニッツは、ロックの『人間悟性論』に対して『人間悟性新論』を出して対抗した。この本は対話篇になっており、ロックの立場に立つフィラレートと、ライプニッツの立場に立つテオフィルが議論をするという構成になっている。

ロックの批判に対して、ライプニッツを代弁するテオフィルは次のように回答する。

- 「有るものはすべて、有る」「或る事物が同時に有るかつ有らぬことは不可能である」といった真理について一致してない人もいるのではな

いか↓もちろんそのような人はいる。しかし生得観念は存在する

- 生得観念が明確に刻まれているはずの子供に、それが認められないのはおかしくないか↓生得観念は、子供においてすぐに認められるようなものではない。しかし生得観念は存在する

- 実践的な生得観念はどうなるのか。盗賊などが道徳法則を持っているとは思えない↓せいづらは生得観念を持っているが、常にそれを意識しているわけではない

このように、官僚答弁じみたことしか言わない。

当然ここで疑問になるのは、その根拠である。いや、生得観念があるとお前が主張するのはわかるけど、その根拠を示してみろよ、と。

それに対して回答している箇所を引用しよう。

フィラレート「でももしそんな反論が正しいとしたら、それは普遍的同意に基づいた証明というものを無にしていますよ。多くの人々の推論は次のようになってしまいます。即ち、良識を持った人々が容認する原理は本有的である、私たちと私たちの味方は良識を持った人々である、それ故私たちの原理は本有的である、と。馬鹿げた推論の仕方ですよねえ。無謬性へと直結してしまいます。」

テオフィル「私はと言えば、普遍的同意を主要な論拠にはせず、確認のために用いています。——中略——それに、教養のある人々は野蛮人たちに比べて良識をより良く用いていると言われるだけの理由があるように私には思えます。なぜって、教養のある人々は野蛮人をまるで獣のように簡単に征服してしまうことによって十分にその優越性を示し

ているのです。必ずしもそれに成功し得ないとすれば、それは、また猷同様、彼らが深い森の中に逃げ込んでいて追いつめることができず、無駄骨を折ってしまう時です。」(『人間悟性新論』)

つまり、「生得観念の存在を主張する俺らは、その気になればそれ以外を叩き伏せることができるんだ。だから俺らは正しいんだ」と言っているわけである。ライブニッツは内容のある反論を全く出せないのだ。

唯物論と経験論は違う

第二に、経験が知性に観念を備える別のみなもとは、知性がすでに得てある観念について働くとき、私たちの内の私たち自身の心のいろいろな作用についての感覚である。それらは知覚、考えること、疑うこと、信ずること、推理すること、知ること、意志することであり、私たち自身の心のいっさいのさまざまな働きである。(『人間悟性論』)

誤解されがちなのだが、経験論は唯物論と同一視されたり、デカルトと対置されたりするようなものではない。ロックは精神の存在を前提として受け入れ、心的作用を我々の経験の由来する先の一つに含めている。二元論を前提とした上での議論が経験論なわけだ。ただ、生得観念を否定する点において、観念論と区別されるわけである。

ヒューム（1711年～1776年）

先に見たように、認識論は出自を二元論に求めるものであり、ロック、ライプニッツは当然このことについて意識していた。自分は二元論のなかの一分野について議論している、ということを知った上での限定的な議論をしていたわけだ。だが、後にこの出自を忘れ、トンチンカンな議論をする認識論者が現れた。それがヒュームであり、カントである。

哲学史の忘却

重要な問題で、人間の学のうちはその解決が含まれていないようなものは一つとしてなく、われわれがこの学問をまだよく知っていないのに確実に解決されるようなものはない。だから、われわれは人間性の原理を明らかにしようと試みることで、実際は諸学問の完全な体系を目ざしているのである。——中略——ところで、人間の学がほかの諸学問にとつての唯一のしっかりした基礎であるのと同様に、この人間の学自体に對して与えうる唯一のしっかりした基礎は、経験と観察におかれなければならない。（ヒューム『人性論』）

認識論は、デカルトの二元論を前提としたものであった。だがそれはヒュームの時代になると忘却され、変質していくことになる。ヒュームはロックの教説を無批判に受け入れる。そしてそれを、自然科学とのアナロジーで理解する。個々の実験によって自然科学全体が形成されるように、個々の認識

が積み上がって自然科学、形而上学その他あらゆるものが形成されるのだろ
う、と。このような世界観のもとで、自然科学の基礎づけという課題に取り
組む。それは、「原因と結果」の必然性が、どのようにして個々の経験から
生じるのかを説明する試みになる。

挫折から懐疑論へ

したがって、残された選択肢は、偽りの理性か、まったく理性がない
か、それ以外になにもないのである。『人性論』

「原因と結果」の考察を行った結果、ヒュームは次のように結論する。因
果関係を生むのは活気である。それを受け取った時の勢いから、それを必然
的結合と思っているだけだと。それはただの感覚に依拠するものでしかない。
太陽が東からのぼって西に沈むのを見て、それを普遍的法則だと思ひ込むよ
うに、何度も同じ経験を繰り返すことで形成した、脆弱な基礎を持つもので
しかない。ここから、それらに依拠している既存の学問というのは極めて不
安定な立場しか無いということが導かれる。

ヒュームは、科学を基礎づけようという問題意識から考察を進めた。だが
結果として、科学が何ら厳密な基礎づけを持っていないということを証明す
るに至ったわけだ。そして最後には懐疑論に陥り、ついで、こんな考察なん
てやめて楽しく生きようみたいなことを言い出す。

劣化した経験論者

物体が存在するか、そこにおいて見出される法則が真か否かという問題は、デカルトが実体概念を考察したときになされている。その成果として二元論が確立し、その前提の上に認識論が成り立っているわけだ。二元論を前提とした認識論で、その二元論を説明しようというのは、歪で意味不明な試みに見える。認識論は無前提で誰もが受け入れるものではないし、自然科学とのアナロジーで理解されるようなものでもない。そのアナロジーが成り立つというのは、ヒュームの思い込みでしかないわけだ

ヒュームは哲学史についての理解が浅いのだ。そして、認識論を誤って理解し、無意味な問題に取り組んでいるわけである。ヒュームは哲学者というよりは、たまたまロックを読み、それを自分流に解釈してみた素人、というほうが正しい。本来なら、哲学史的にはあまり重要ではない人物なわけだ。

カント(1724年~1804年)

カントの世界観とヒューム批判

カントはヒュームと世界観を共有している。自然科学において、個々の実験の積み上げによって抽象的な理論が形成されるように、個々の基礎となる認識が積み上がることによって、自然科学全体や形而上学といった抽象的なものも成立しているのだろう、と考える。

ヒュームはその基礎的な認識が、経験に由来するとした。だが、そこから普遍的な法則を導こうとして失敗した。ならば、認識の基礎にあるのは経験ではなく、精神だということになるのではないか。カントはこのような発想をする。この観点のもと、ヒュームが『人性論』で行った議論を構成し直す。そして、人間精神こそが認識の基礎だと結論する。

妥協

ヒュームを批判し、認識の基礎にあるのが精神だと証明したとしても、それでやつとスタート地点に立てたに過ぎない。ヒュームは『人性論』において、経験が認識の基礎であるという前提のもと、自然法則をそこから導こうとした。これと対比するなら、カントはまだ前提段階の話しかしていないわけだ。ヒュームのように、そこから体系化を進め、諸々の事象を説明しなければ、話は終わらないわけである。

だが、カントは体系化をはじめる前に妥協を入れる。というのも、このま

ま進めても荒唐無稽なものしかできないことが、目に見えているからである。すべての認識の基礎が精神である、と主張することは、すべての事象、すべての自然法則が自分の恣意になるということである。他者も、宇宙も、自然法則も、我が意志さえすればそのとおりになる？果たしてそのようなことがありえるだろうか？このような主張ができない程度には、カントは常識人だったわけだ。

そうして出て来るのが、精神は「感性、悟性、理性」の3つにより構成されている、という主張だ。この三分は、カントの妥協の産物でしかない。

感性、悟性、理性

カントは自説を常識的なものにするために、まず精神から理性を分離する。理性とは、私の精神に属しながらも、私の意識に上らず恣意的にならない領域だ。そして、自然法則その他をうみだす能力を、これに帰す。そうすれば、自然法則その他がすべて自分の精神に依拠し、恣意的になるという主張をしなくても済む。先の主張が、すこし穏便なものになったわけだ。さらに、精神から感性を分離する。感性は、外部に存在する事物を把握する役割を持つ。そうすれば、外部にある事物がすべて自身の精神に依拠する、という主張をしなくても済む。そうして最後に残ったものに、悟性という名前を与える。結果、精神は「感性、悟性、理性」の三つにより構成される、という主張になる。こうして、カント本来の主張は、穏便で骨を抜かれたものになるわけである。

純粹理性批判の本質

カントは一人で勝手に妥協し、勝手に精神を三分割したあと、その三つの関係性を勝手に考察し始める。妥協の結果、これまで全く無用であった問題に取り組む必要が生じたというわけだ。だが、その考察を延々と続けるも、結論が見えないまま『純粹理性批判』は終わってしまう。

カントは、最初にヒュームを批判した時までは勢いは良かった。だが、結局は批判しただけで終わり、そこから先へ進むことができなかったわけだ。

カント哲学の分析

ここまで、個々の哲学者の詳細な内容には踏み込んで来なかった。カントについて以下で突っ込んだ考察をするのは、カントのせいで哲学史の理解が歪められているからである。それを是正するには、カント哲学についてある程度知る必要があるのだ。

カントは、哲学史上の系譜で言えば「二元論を前提とした認識論の一派」に過ぎず、さして重要な哲学者ではない。ヒュームを劣化した経験論者とするなら、カントは劣化した観念論者でしかないのである。

ア・プリオリな総合的判断

カントは、認識の基礎は何か、という問題を「ア・プリオリ」と「総合的判断」という言葉を使って定式化しようとする。

- ア・プリオリ……経験によらないという意味。反対語はア・ポステリオリ
- 総合的判断……認識を拡大するような判断。反対語は分析的判断

「○○は△△である」と主張するとき、最初から○○という概念の内に含まれていることを言明する場合と、含まれていないことを言明する場合がある。

例えば、図鑑を見てりんごというものについて知っており、それが「赤い、

果物、丸っこい」という性質を持っていると知っている時、「りんごは赤い」といえばそれは分析的判断である。既にりんごについて持っていた概念のうちの一つを言ったただけからだ。

その後、りんごを初めて手に取り、食べて見たとする。そして、「りんごは美味しい」ということを新しく知ったとする。この時「りんごは美味しい」と発言するとする。先と同じように「○○は△△である」という文章構成ではあるが、この場合、最初に「りんご」という概念について持っていなかったものを新たに付け加えている。主語に術語が含まれていないもの、それが総合的判断である。

述語Bが主語Aに、この概念Aに含まれている有るものとして属するか、そうでなければ、BはAと結びついていないけれどもBはまったく概念Aの外にあるかである。前者の場合には、私は判断を分析的と呼び、後者の場合には総合的と呼ぶ。『純粹理性批判』

このカントの区分で言えば、普段我々が行っているのは「ア・ポステリオリな総合的判断」である。何にしたって、経験によって新たな知識を得て、

	アプリオリ	アポステリオリ
総合的判断	カントは主張する	あって当然
分析的判断	あって当然	考える意味なし

概念を拡張していくわけである。そもそも、それ以外に認識を拡張する手段など、あるわけがないではないか。普通はこのように思われているわけである。

それを踏まえたうえで、カントは次のような問題提起をする。「ア・プリアリな総合判断があるのではないか」。つまり、経験によらず認識を拡張する仕方があるのではないか、と言うわけだ。それが存在することが示せれば、晴れて「認識の基礎にあるのは経験ではなく精神である」ということを証明できるわけだ。

精神が認識の基礎であることの証明

カントは、ア・プリアリな総合的判断が存在する証拠を三つ挙げている。

- 原因と結果
- 数学
- 自然科学

原因と結果

カントはヒュームの考察を、「ア・プリアリな総合的判断」が存在する証拠として利用する。「原因と結果」の関係性は、明らかに総合判断に属するものだ。例えば「夜が来たら朝が来る」という言明において、夜という概念に朝が含まれていたりしない。だが、「原因と結果」を結び合わせるものは経験ではない。ヒュームが明らかにしたように。経験ではないということ

は、ア・プリアリであるということだ。こうして、ア・プリアリな総合的判断の存在が証明されるのである。

数学

12の概念は、私が単に7と5のあの結合を考えているということによってすでに考えられたのでは決していないし、また私がそのような可能な総和についての私の概念をいくら分解しても、そのことの中には私は12という数を見出さないであろう『純粹理性批判』

$7+5=12$ という式を例にとる。7と5をそれぞれ分析しても、12という数は得られない。したがって、これはア・プリアリな総合的判断らしい……。哲研例会においては、あまり部員の賛同は得られなかった。「普通に考えれば、自然にそういう法則があることになるんじゃないの？それがなんでも理性の作用によることになるの？」

自然科学

というのは、物質の概念においては、私は持続性を考えるのではなく、単に物質が空間を充たすことによって空間のうちに現在していることだけを考えるからである。それゆえ、物質の概念のうちに私が考えていなかった或るものをア・プリアリにこの物質の概念に付け加えて考えるためには、私は現実に物質の概念を超えて行くのである。『純粹理性批判』

物質の概念の内には「質量保存の法則」と「作用反作用の法則」は含まれない。したがって、これはアプリアリな総合的判断だ、というのがカントの証明である。哲研例会においては、先の数学の例よりも更に怪しいとして賛同は得られなかった。「数学までならわからなくもないけど、自然法則まで人間精神に依拠してることだろ？さすがになくね？」

核心部はヒュームの議論

いくつか根拠を提示してはいるが、原因と結果の矛盾以外は脆弱なものである。だから、ヒュームの矛盾がこの批判の要になっていることがわかる。あとはただの水増しの数合わせに過ぎない。

大陸合理論とイギリス経験論という区分は嘘

カントは「二元論を前提とした認識論の一派」である観念論者であり、哲学史上では傍流に位置するわけだが、カント自身は知ってか知らずか、この哲学的地位を無視し、自分が全く新しいことを言い出したんだ、過去の哲学を自分が統合したんだ、という主張をする。これは嘘なので、真に受けないほうがカントを理解しやすい。

例えば

- カント哲学は大陸合理論とイギリス経験論を統合したものである

という主張がある。大陸合理論とイギリス経験論という別種の理論が平行して存在し、それをカントが統合したのだ、という主張だ。大陸合理論は、デカルト、ライプニッツ、スピノザを。イギリス経験論はロック、ヒュームを指す。

これはもちろん誤りである。先に見たように、経験論はデカルトを前提として生まれたものだからだ。大陸合理論とイギリス経験論とを、同レベルのものとして語っている時点で既にカントは間違っているのである。

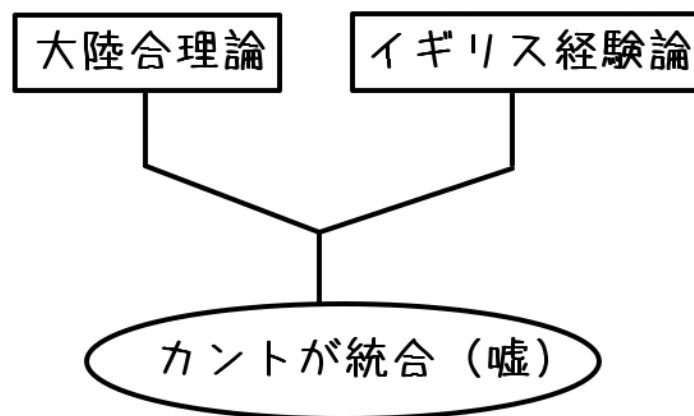
カントは哲学史について不勉強であり、ヒュームか、あるいはせいぜいライプニッツの認識論くらいしかまともに勉強をしていない。だから、このようなのはずれな主張をしてしまうのだ。

だが、「カントは大陸合理論とイギリス経験論を統合した」という主張は一般に真実だと思われており、哲学や倫理の教科書にも載っている。何故このようなことが起きるかと言うと、その理由は簡単である。後世カントの影響が増大する中、カントが自分の哲学を大きく見せるためにつけた嘘が、疑われることなく鵜呑みにされてきたからである。

他に、

- カントは超越論的哲学を創始した。これは対象についての学ではなく、認識自体に向かう学問であり、これまで試みられなかった新しいものである

という主張があるが、これも嘘である。認識自体に向かう学問は、先に見たようにロックが始めたものである。カントの超越論的哲学というのは、それを別の言葉で言い換えたものにすぎない。だから新しい試みでは全く無い。



ヘーゲル（1770年～1831年）

ヘーゲルの弁証法は、諸々のどうでもいい事情で意味がわからなくなっている。そこで、それを段階的に分析する必要がある。

弁証法の本来の意味

ヘーゲル本来の主張は単純である。それは、真理は経験的にしか獲得できない、である。今までは、Aという経験をしかしたことが無く、それを真だと思っていた。だが、それに反対するBという経験をした。それにより、これまで真理だと信じ込んでいたことが真理ではない、ただの思いこみだということがわかった。そうしてひとつ賢くなり、真理を手に入れる。もし、その獲得した真理すらまだ思い込み過ぎないとしても、それはまた、経験を繰り返すことによってどこかでそのことを知ることになるだろう。このように漸次的な仕方では、真理は獲得できる。

これは当たり前のことである。何度も料理をすることによって、おいしい卵焼きの作り方を知る。ご飯を炊くための水加減を知る。目的地へいくための効率のよいルートを知る。目的の情報を得るにはどのようにしてググればよいかを知る。人との接し方を知る。パソコンが壊れた時の対処法を知る。効率のよいノートの取り方を知る……これらのことは、実際に経験を繰り返すことによってしか、得ることができない。ただひたすら、卵とは何か、ご飯とはなにか、水とは何かについて考察したところで、わかるわけが無いのである。

弁証法と体系

発展的もないし正当性も確認できないまま内容上の違いを空虚な深淵に投げ捨てるのが、哲学的なものの見方だと考えられている。『精神現象学』

だが、哲学においては、この当たり前のことが共有されていない。真理の獲得のためには、経験によってではなく、自らの精神の内奥に入り込むことが重要だと思われる。自己の精神に没頭し、そこに現れる観念を分析することによって、純粋な真理あるいは神に到達できる、とされているのだ。鍋でしめのうどんを煮込みすぎたらドロドロになるというのは、経験的に知る必要はない。自己の精神に没頭し、うどんという概念について追求すればそれでわかる、という主張を真面目に語っているわけだ。こういう頭の悪いことを多数の哲学者は信じているわけである。

なぜ哲学の分野では、弁証法が共有されていないのか。それは、非弁証法的な方法が体系を築いており、それに皆が騙されているからだ、と考える。たとえばカントは、観念論的な体系を強固に築いている。原理論、演繹論と細かに分けられた叙述。難解で紛らわしい定義。それらは理解するのに骨が折れ、一見して否定することができない。それに哲学の初学者は圧倒されてしまう。そして、そこに何か有意味なものがあるかの様に錯覚し、囚われる。結果、そこで用いられている方法が、どれだけ不合理で的外れで馬鹿げたものであっても、深淵な意味があるかのように思い込んでしまう。深遠すぎて私にはよくわからないが、それはきっとクン・フーが足りてないだけ

で、本当はすごいのだ。無意味なものならこれほどたくさんの研究者が人生をかけて携わっているわけも無いし、彼らは社会的な地位も認められているし……。このように思ってしまうのである。そうして先達と同じく、それを理解するための研究を開始し、やがてその深遠さを理解できないまま人生を終えるのだ。

観念論は、強固な体系を築いている唯一の哲学である。対抗勢力がないゆえ、莫大な影響力を持ち、哲学業界に跋扈している。だから、誰もそのバカバカしさを咎めることができないし、それを否定する言説を聞き入れるやつもない。このように整理するわけだ。

弁証法の体系の構築

真理が明確な形をとって存在する真の形態としては、学問的な体系し
かりありえない。『精神現象学』

ならば、カントに匹敵する体系を築けば、哲学の世界においても弁証法は優位にたつのではないか。弁証法が正しくないからではなく、単に政治的に負けているから、弁証法が受け入れられないのだ。このようにヘーゲルは考える。

つまり、弁証法の体系の基礎にあるのは、ハツタリに対して同じくハツタリで対抗しようという発想なのである。体系自体に価値などない。それはただの、自己の主張を通すための道具にすぎない、という割り切りを最初からしているのである。学問の世界において圧倒すること。それが目的だ。

そうしてできたのが、『精神現象学』である。そこで、ヘーゲルはカント

に匹敵するような、形式主義的で、厳密な体系を築くわけである。

弁証法の多義性

ここまですが前置きである。次に、弁証法がその意味を変質する過程を見ていこう。

ヘーゲル以前の弁証法

ヘーゲルは体系を築き、その力で持つて弁証法を学問の世界の王者にしようと図る。だが、ここでヘーゲルは迷うわけだ。それに本当に意味はあるのか、と。

弁証法に到達した哲学者はヘーゲル以前にもいる。例えばソクラテスの対話術はまさしく弁証法であり、デカルト、スピノザの取る総合的方法も同様だ。だが、彼らは弁証法にたどり着いても体系化をはかったりはしない。それに意味が無いからだ。弁証法とは漸次的に真理に近づく手法である。それが真であることを相手に認めさせたいなら、実際に弁証法を使えばいい。まず相手の話を聞く。その上で相手と自分の共通点を探り、そこから相手が曖昧にしている箇所を一つずつ潰していく、結果互いに一致をする。そうすれば弁証法の有効性について認めるだろう。

もっと言えば、それについて一々相手に認めさせなくても、弁証法が真理に達する方法として有効だ、ということを知っておけばそれで十分だ。その地点に到達すれば、あとはそれを用いて別の分野に行き、自分に必要な真理について漸次的に蓄えていけばいい。真理に達するには経験が必要だと

いう結論に至ったのに、これ以上哲学の領域にいてどうなるのだ。普通はこういう発想になるのである。体系化をする必要など、どこにも無いのだ。「真理が明確な形をとって存在する真の形態としては、学問的な体系しかありえない。」とヘーゲルは言っているが、これは嘘なのである。そもそも体系化というのは、カント以降でしか出てきようのない発想なのだ。

ヘーゲルは体系化の仕事を正当化したい

だが、ヘーゲルは体系化を図る。それは、ヘーゲル独自の深淵な思想的理由から……では無く、ヘーゲルの俗物性がさせるのである。ヘーゲルは、自分を学者だと自己規定している。だから、大学内部にとどまって、の上がろうという発想しかすることができない。そのためには、自分が弁証法に到達したというだけでは不十分だ。今の状態では、自分は非主流な説を隅このほうでぼそぼそ唱えているだけの人間にすぎない。観念論に戦いを挑み、同じ仲間である哲学者たちに弁証法を認めさせ、哲学の業界において主流になる必要がある……。こうして、ヘーゲルは体系化をはじめめる。

弁証法の体系を作り、それによって既存の哲学体系を一掃する。このような発想は、学者しかできない。もちろん、それを実現するためには多大な苦勞が必要になる。しかし、そこに積極的、一般的な意味があるかというところ、ないのだ。ヘーゲルがたまたま学問という分野にいた、そしてそこでの成功を図った、というのがその理由なのである。

もちろん、ヘーゲル自身は、自分のやっていることが自己のいる時代、場所、仕事等の特殊な条件に規定されていることに気づけない。だが、割りき

ってできるほど、体系化の作業は楽なものではない。けれども、ヘーゲルは体系化くらいしかすることがない。学者であることを捨ててまで何かをするだけの気概もない。どうやって、弁証法の体系化という無意味な作業をやり遂げることができるだろうか？

弁証法の転倒

わたしたちの時代が誕生の時代であり、新しい時節への移行の時代であることを知るのは、むずかしいことではない。精神はこれまでの日常生活と観念世界に別れを告げ、それを過去の淵に沈め、変革の作業にとりかかっている。『精神現象学』

そこで、ヘーゲルは次のような意味付けをして、正当化をはかる。弁証法の体系化という仕事は、世界全体の潮流の一環である。現に、フランス革命にせよ何にせよ、歴史を見れば、弁証法に類似した事例が、そこかしこに見えるではないか。そこでは古い体制が、自身のうちに潜むものによって否定され、新しい体制へと移行した。これは、私が哲学の分野で見出したことと同じである。自分はその、偉大な流れのうちにいる。弁証法に私が見出した「否定され、肯定され、より高い段階へいく」という原理は、宇宙レベルで存在している原理だ。それは、哲学、歴史にとどまらず、認識過程でも学問でも宗教でも植物の開花でも、とにかくありとあらゆるものに適用される原理である。自分のしていることは、その潮流を哲学の領域において遂行することだ……。俺は哲学界のナポレオンだ……。哲学王に俺はなる……。こうしてヘーゲルは、自分の仕事を合理化するのである。自分で自分を騙すのだ。

こうして、ヘーゲルは弁証法の体系をやっと完成させることができた。だが、この正当化は、元々ヘーゲルが示したかった弁証法の本来の意味を、知らず知らずのうちに歪めることに繋がる。

ヘーゲルは、弁証法から抽出した「否定され、肯定され、より高い段階へいく」という原理こそが、弁証法のコアであるとし、それを宇宙において遍く存在する原理にまで昇華する。そして、我々が先に見ていた弁証法は、本来の弁証法の一部を表しているものにすぎない、と逆規定する。

結果、弁証法という言葉は、本来の単純な方法論の呼び名から、国家、歴史、世界を包括する原理の呼び名になるわけだ。こうして、教科書でおなじみの

- 絶対精神
- 自己展開
- 正反合

といった仰々しい言葉が、弁証法に付与されるわけである。

ヘーゲルは、弁証法を転倒しているのだ。ヘーゲルは、最初に弁証法に到達したときには、その単純な法則を理解していた。だが、その一部を取り出し、昇華し、そこから宇宙規模であらゆるものに通用する原理にしたあと、それで抽出元の弁証法自体を逆規定するという、訳の分からないことをしているうちに、ヘーゲル自身が弁証法が何を意味するのかわからなくなってしまうわけである。

ヘーゲルは、自己のいる時代、場所、所属する組織、仕事、どうやって食

っていくかという俗っぽい要請を乗り越えられず、弁証法にたどり着いても、それ以上先に行けないのだ。そうして、自身がたどり着いた弁証法自体を、その要請に従属させ、変形してしまうのである。

弁証法は単純

弁証法は、特殊な発想でも何でもない。日常的に経験する当然の真理であって、理解しがたいものではないのである。ただ、ヘーゲルの俗物性により、無駄に体系化し、無駄に多義的で理解し難いものになったのだ。

だから、ヘーゲルの弁証法について知りたいと思っただけでも、体系の身を真面目に考察しなくていい。形式主義に対抗しうるだけの体系を作り、読者を圧倒するために作ったものなのだから、別に我々はヘーゲルの意図通りに圧倒される必要は無いのだ。また、絶対精神云々もまじめに考察する必要は無い。そこだけ切り取って考えても意味が取れないのである。

デカルトは正しいか

武田宙大

近代哲学の父デカルトは、近代科学の父でもある。なぜなら、今の科学はデカルトの主張した演繹法によつて成立している。それは

一、明証的に真であると認めたもの以外、決して受け入れないこと
(明証)

二、考える問題を出来るだけ小さい部分に分けること(分析)

三、最も単純なものから始めて複雑なものに達すること(総合)

四、何も見落とさなかったか、全てを見直すこと(枚举・吟味)

この四原則となっている。しかし、デカルトの四原則は現実的には成立しない。そしてデカルトの矛盾を見出すことは、近代科学自体の否定にもなるのである。

たとえば、いうまでもないが、物理学の宇宙論の科学者はそもそも「明証」でなく「仮説」をもとに理論を構築している。だから、既にデカルトの四原則の「明証」に反している。

次に「分析」と「総合」は相互関係にある。「考える問題を出来るだけ小さい部分にわけて最も単純なものを求めた上で、そこから始めて複雑

なものに達すること」が出来ればいいということになるのだが、これも物質の定義ひとつとっても細分化して素粒子を求めてもさらにミクロの世界があることが予見されていることからして「できない」ことがわかる。

いっぽうで、最も単純なものから始めて「複雑なもの」へ考える問題に達することができるか？というところ、素粒子や原子から人間の心理学に達せられるのか？という命題になるのだが、これも自明ではあるが答えられないので、やはり「できない」

ましてや、「何も見落とさなかったか、全てを見直すこと」も現実の科学や工学ではできていない。だから「想定外」が続出している。

こうして考えると、デカルトの四原則は理想ではあっても現実では使えないものだということが明らかである。したがって、それに立脚する近代科学の理論と手法も誤りであるということになる。

■知識の連鎖による科学論文自体が誤り

現代科学の論文は「知識の連鎖」によつて成立している。「知識」というのは基本的には既存の学会で発表された科学論文である。

「知識の連鎖」というのは、「一応証明された」「正しいはず」の理論を引用して三段論法によつて自説を論じていく手法である。実際には引用する論文を「公理化」して使用することである。

しかし、既に明らかなように、そもそも引用する論文自体がデカルトの四原則を満たしていないのである。

今の科学は、デカルトの四原則が「無限小」「無限大」の条件で成立するという仮定に成り立っている。

そもそも「無限」とは何かを考えてみよう。「限りなく」と言うわけだが、こう考える時点で間違っている。実際には「人間の思考の中での限りなく」だからだ。つまり、「形而上（けいじじょう）」の考え方である。実際には無限というのは、「巨大な未知」なのであり、有限なのだという事に気づかないといけない。デカルトはこの矛盾に気づいていたのか四原則の「分析」において

「考える問題を**出来るだけ**小さい部分にわけること」とは主張しているが

「考える問題を**究極**に小さい部分にわけること」とは言っていない。だから「総合」における「最も単純なもの」が永久に求められないことを自覚していたのである。

したがって、未知を含有するままの論理や主張で構築された知識の連鎖は常に想定外を生み出すことになり正しいものではない。

このように、デカルトの四原則は実際に一の「明証」まで進めても、二の「分析」で行き詰まるため、三の「総合」に至れない。しかも四の「枚举・吟味」に至っては到底実現できないのである。

ゆえにデカルトの四原則に立脚する近代科学は誤りである。

哲学的航海

なご

知識人の思想というものはいつも崇高でうんざりする。それが現代における人々の見解である。それはすべての思想を信じなかったソクラテスと似ていると言えは似ている。しかし違うのは現代の人々はそれゆえ安易で手近な答えを求めたが、ソクラテスはそこから本当の思想を探究したことである。彼は所詮は世界の良し悪しなど偽善に過ぎないと嗤うニヒリストではなかったし、また片や、この世界は皆愛に溢れそれにより最終的には救われるのだというオプティミストでもなかった。

荒波の中にいて何にも掴まらない。それが彼の航海の仕方であった。だがそんなことが可能だろうか？ 生き方に悩んだ時、手近な何かを掴んでしまうのが人間ではないのか。そしてそれはニヒリズムかもしれないしまたあるいは体の良い自己啓発本かもしれない。仕方がないではないか、溺れ死ぬよりは、と。

しかし彼は言う。

「生きることは死の練習なのだ」と。

我々は溺れると思っているが、それはもしかしたら思っているだけかもしれない。我々は夢を見させられているかもしれない。だれに？ 自分に。波が激しいのは自分が溺れ死ぬと思ってジタバタしていたからであった、とい

う可能性を彼は示唆する。

我々は死から逃げるのではなく、死を（夢ではなく現実）考えるべきだ、というのが彼の態度であった。そして何より我々は死が何であるか知ることができないのだから知らないことにたいして恐れることはそもそもできないではないか、というのをもまた彼の主張であった。

この彼の主張に反駁を加えてみようともしいあなたが考えたなら、あなたはたぶん哲学を始めている。

中動態がきこえる

比較言語学による言語哲学の序説

村山 洋

言語論的転回 linguistic turn によって二〇世紀の哲学は幕を開けた。言語によって人間は世界を認識するのであり、私たちにとつての世界は言語を通して世界に他ならない——それゆえ世界の限界は言語によって規定される。したがって、哲学のなすべきは世界のありようを論じることではない、それを表現してきた言語を分析することである。

言語論的転回には二つの道がある。一つはソシュールの『一般言語学講義』、一つはフレーゲの『概念記法』である。第一の道は言語学の革命であり、第二の道は論理学の革命であった。第一の道はウオーフの『言語・思考・現実』において、第二の道はワイトゲンシュタインの『論理哲学論考』において、それぞれの成果をみた。

しかし、言語哲学と言う場合には常に第二の道が強調される。言語論的転回というタームを有名にしたローティによる同名のエッセイに Saussure の文字は見当たらない。そこには、デカルト・カント・ヘーゲル・フッサールという哲学の王道にフレーゲ・ラッセル・ワイトゲンシュタインが食い入り、ウィーン学団を通して科学的方法論による哲学のスタイルが確立され、それが現在の分析哲学の興隆へとつながってゆく道が想定されている。

本論は、言語哲学の第一の道をもう一度魅力的に描こうとする試みである。

私は第二の道の中で、日常言語の働きを述語論理によって分析しようとする試みを多数みてきた。ラッセルの記述理論やデイヴィッドソンの真理条件意味論はその際立った成果であるし、オースティンやサールの言語行為論も述語論理の命題を「文」のモデルと考えている。そのモデルとは次のようなものだ――

ある集合（対象の集まり）をおき、関数、項、関数値を以下のように定義する。

a は集合の要素であり、関数の項となる。a を項とする関数 F は、関数値 Fa を返す。（例えば、「アリス」と「テレス」よりなる集合をおき、関数「（）は猫である。」がその集合の要素を項にとるとすれば、「アリスは猫である。」「テレスは猫である。」という二つの値が返される。）

さらに、関数値には真／偽のいずれか（真理値）を対応させ、いくつかの「結合子」および反対の真理値（補集合）を返す「否定」によって、真理値から真理値を返す真理関数を与える。（例えば、「（アリスは猫である。）、「テレスは猫である。」にそれぞれ（真、真）（真、偽）（偽、真）（偽、偽）を割り当てると、真理関数「アリスとテレスは猫である。」（「アリスは猫である。」かつ「テレスは猫である。」）は、それぞれ真偽偽偽を返す。）

さらに、「すべて（任意の）」と「少なくとも一つある」を定義することで、量化された文やその論理関係を表現できる。（すべての猫がアリスを愛す。」が正しいとは、すべての x について、x が猫ならば、アリスであるような y が少なくとも一つあり、「x が y を愛す。」が真を返す、ということである。）

こうした分析は確かに魅力のあるものだ。しかし、自然文の背後に形式化

された述語論理の意味論だけを思い浮かべているのは危険である。例えば、日本語と英語の自然文が同じ形に形式化され、その真偽が同じ方法で検証されたでしょう。しかし、それをもつて二つの文の性格をどこまで同一視していいのだろうか。そこにたどり着けるだけの分析力も重要ではあるが、同時に、その過程で日常的な言語行為の膨大な要素が切り落とされていることも自覚しなければならない。

本論が取り上げるのは態 (voice) である。それは検証理論的には同じ意味の文に対し、行為の為し手が語っているのか、受け手が語っているのか、第三者として語っているのかによって異なる表現を与える文法規則である。本論は中動態という古代印欧言語の文法組織に対応するものを、比較言語学の観点から日本語の中に求めようと試みる。そこには第二の道を歩むだけではたどり着くことのできない、第一の道においてはじめて出会うことのできる問題がある。

命題論理学を整備したアリストテレスのオルガノンにおいても、分析論後書の命題論理に先立って、範疇論における文法的考察がなされていたことを思い出したい。日常言語分析においてはこのバランス感覚が大切だと思う。

話題・説明

象は鼻が長い。

「形式論理と文法の関係は三上も気を配っていた。『象は鼻が長い』の末尾に「近代論理学抄」が付けられているのはこの意識の現れであろう。」

この文をどこかで耳にしたことのある人は多いだろう。これは学校文法で悪名高い、いわゆる二重主語文である。「は」も「が」も主語のマークである、ではこの文の主語はどっち？と聞かれて、答えられるだろうか。

この問題の歴史は長く、明治三〇年に大槻文彦と草野清民との間でたたかわされた「総主論争」にまで遡る。大槻が欧語文法に則って、文は主語と説明語 (述語) よりなるとしたとき、草野が次の反論を寄せた。「東京の都は面積 (が) 広く、人口 (が) 多し。」この主語は都か、面積か、人口かというのである。この文は少々複雑なので、分析はあとまわしにしよう。まず、冒頭の文を英訳してみてください。

An elephant has a long trunk. (象は長い鼻を持つ。)

An elephant's trunk is long. (象の鼻は長い。)

象と鼻と、どちらを主語にとるかで構文が大きく変わる。しかしどちらも「象は鼻が長い」とは訳せない。日本語と英語では言語の仕組みが全然違うのだから一対一に訳が対応するわけがない、というのはそのとおりである。しかし、なぜ訳が対応しないのかを説明できるだろうか。

リーとトンプソンの説²に従えば、次のような巧妙な訳をつくることができる。

As for an elephant, its trunk is long.

² (C. N. Li & S. N. Thompson 1976)

日本語は話題の副助詞「は」と主格の格助詞「が」を持つので、「主語・述語」型と「話題・説明」型の両方の性質を持つと分析されている。

仕掛けはこうである。言語はおおまかに、「主語・述語」(主語卓越)型と「話題・説明」(話題卓越)型を両極として分類できる。前者の典型は英語で、基本文に主語と述語の組が必ず必要である。後者の典型は中国語で、基本文に主語は必ずしも必要でなく、話題を説明する、という形を取る。ヨーロッパの言語には前者の、東アジアの言語には後者の性格を示すものが多い。日本語も後者に分類できる。そして、「は」は話題のマーカである。つまり「象は鼻が長い。」という文は、象について言えば(話題)その鼻は長い(説明)という構造になっている。象は鼻が長い。」と「象は水を飲む。」はどちらも象という話題について鼻が長いのだとか水を飲むのだとか説明しているであって、片方を取りたてて二重主語文などと分類する必要はないだろう。「東京は渋谷にだけ行った。」(注文で)僕はウナギだ。」なども「は」を話題の提示と解すればよい。

英語をはじめとするヨーロッパの言語と比較して日本語に特徴的なのは、「は」「に」「を」「が」「の」といった助詞である。これを「象」「鼻」「長い」といった単語の間にニカワ(膠)のように貼りつけるので、膠着語とよばれる。そのなかでも、「は」は話題を提示する、非常に強力な働きを持っている。その例を以下に示そう。

象鼻文のような二重主語(double subject)現象は、北京語、韓国語、ラフ語(中国雲南省、ミャンマー、タイにわたる山岳地帯で広く話される)などにみられ、「話題・説明」型言語の特徴の一つである。

＊この作用を三上は「ハのピリオド越え」と名づけた。『象は鼻が長い』には、助詞の中でも「ハ」がいかに際立った働きをなすかが「話題の提示が本務、ガノニヲ格の代行が兼務」という洒落な口ぶりで分析されている(三上1960)。なお、三上はすでに一九四二年の論文で、日本語の主述関係を否定

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとんと見当がつかぬ。

この二番目と三番目の文は、さきの二重主語文と構造上同じである。それは英訳をみるとよくわかる。

I am a cat. As yet I have no name. I've no idea where I was born.

英語では、原文の二文目と三文目にはない「吾輩」が補われている。吾輩は名前がない、吾輩は見当がつかない、といった具合である。では、漱石の原文は主語が省略されているのだろうか。それよりも、次のような解釈に説得力があるのではないか。

吾輩は(主題)猫である(説明)。名前はまだない(説明)。どこで生れたかとんと見当がつかぬ(説明)。

「は」がどれだけ強力な作用を及ぼしているのかわかる。二文目、三文目も、主題が吾輩であることは一文目から明らかである。このように、日本語において文は述語だけで成立する。主格の「が」はあってもよいし、なくてもよい。そして主題は文の中に明示されることもあれば、文脈によって示されることもある。次の文は、文法上は問題ないが、主題を文中に明示していない。

し代わりに題述関係を認めている。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

このあとに「夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。」と続くので、英訳するときは主語に「the train」を補うのが有名なサイデンステッカーの訳である（この小説は「I」を使うことができない事情がある。そうであれば、主人公が車窓から眺めていることをくんで「I found myself in a snow country」のように書きだしてもいいだろう）。この文は、それだけ切り取れば話題化のない無題文ととってもいいが、「長いトンネルをぬけたところは、雪国だった」という解釈も許すものと思う。「It was a snow country where the train got through the long tunnel.」のような訳文もあるのかもしれない。いずれにせよ、主題がいかに文脈に依存するかをよく示す例である。

それでは逆に、「主語・述語」型の言語はなぜ文の基本要素に主語が不可欠なのだろうか。ひとつの原因は、主語と動詞のあいだに形の対応関係があるからである。英語ならば、動詞が「am」なら主語は「I」であって「me」や「mine」ではなく、主語が「I」なら動詞は「am」であって「are」や「is」ではない。片方を決めればもう片方も決まるようになってくる。「I read the book.」には名詞「I」と「the book」があるが、主語は「I」である。主語でなければ「me」になるし、主語が「the book」なら「reads」になるはずだ。しかし、「話題・説明」にこのような対応関係はない。話題を示す副助詞「は」を使ってみよう。

そういうした話題のマークは、韓国語 (ju un 'ol nun) 'アイヌ語 (anak) '、

私とその本を読む。(私とその本を読むこと。話題化なし)
私はその本を読む。(が格の話題化)
その本は私が読む。(を格の話題化)
君にはその本を読む。(に格の話題化)
ここではその本を読む。(で格の話題化)
今日はその本を読む。(時名詞の話題化)

動詞以外のどの要素も自由に話題化できる。英語でこれに対応するのは分裂文(強調構文)である。

It is me (I) that read this book. / Who read this book is me.

(主語の話題化)

It is this book that I read. / What I read is this book.

(直接目的語の話題化)

It is you that I read this book. / Who I read this book is you.

(間接目的語の話題化)

It is there that I read this book. / Where I read this book is there.

(場所名詞の話題化)

It is today that I read this book. / When I read this book is today.

(時名詞の話題化)

話題化されたことに対し、that 節や Wh-節で新情報が説明されるの

タイ高地のリス語 (nya) にもある。

は「は」と共通している。また、話題化のために「it」や「Wh-」で仮の主語を置く。動詞が「reads」にならないことで話題化される前の意味上の主語が意識されているが、しかしこれはこれで二重主語文と言いたい気もする。それでは、日本語の「は」に英語の分裂文が相当すると考えてもいいのだろうか。いけないのである。英語の分裂文は「象は鼻が長い」を作れない。

*It is an elephant that its trunk is long. / *Whose trunk is long is an elephant.

ここに、話題 (Topic) と主語 (Subject) の決定的な違いがある。分裂文は主語と述語が対応した完全な文から名詞句を取り出して強調する。例示したように「は」にも格助詞を取り出して強調する機能があるが、それはあくまで兼務であつて、本務は話題の提示である。「象は鼻が長い」は、「象は」が格助詞の働きを兼ねずに本務のみを遂行していて、話題化なしの文から派生的に作ることができない。これに対して強調構文は派生的な構文であり、兼務に徹している。

話題と主語の違いをさらに鮮明にするために、中国語から強い影響を受けているシンガポール口語英語を紹介しよう。ここでは日本語と同様に代名詞が自由に脱落し、そして三単現の「s」が失われている。

I got very kind mother. Look after the kids.⁶

⁶ (Sato & Kim 2010, p. 11) シンガポール口語英語の「got」には be 動詞のような働きがあり、「Got people want to go. 行きたがる人たちがいる。」のように使う。

この二文目を正しく訳すことができるだろうか。標準的な英語なら「She looks after the kids.」と言うところである。しかし、これは主語が省略されているのだろうか？ そうではなく、話題となっている私の母がどれほど優しいのかを説明していると理解すべきだろう。敢えて訳すなら「私にはとても優しい母がいる。子供たちの面倒を見てくれるんだ。」といったところか。

主語と述語の対応の他にも、英語にはさらに強力な束縛がある。それは基本文 (SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC) のすべてで主語を必要とし、しかも主語は必ず文頭に来るという束縛である。この束縛は、形式主語という特異な文法を要請する。例えば「I am hungry.」は「I」において主語と話題が一致している。日本語に訳すなら、(私は) お腹がすいた、である。「私は」をあえて入れる必要はないが、入れても意味は変わらない。しかし、「It is a rainfall.」ではどうか。日本語に訳せば、雨降りだ、である。ここに「それは」を入れることはできない。この「it」はなんの内容も表さない主語 (虚辞) である。このような表現は日本語にない、「主語・述語」型の言語に顕著な特徴である。

「主語・述語」型の言語の中でも、虚辞をどのくらい利用するのは異なっている。「It rains.」をスペイン語に訳せば「llueve.」、イタリア語に訳せば「Piove.」という述語のみでよい。面白いことに、英語もかつては事情がちがったのである。一〇〇〇年ほど前の古英語は虚辞の「it」をとらなくてもよかった。天候や時刻の表現以外でも無主語文 (非人称構文) がよく用いられ、その動詞は意味上の主語が何であれ三人称扱いだった⁷。それどころ

⁷ 有名な例に、シェイクスピアの時代まで使われていた *methinks* (…と思

か、文の先頭には動詞がくるのが普通で、主語の人称代名詞が脱落することもあった。このように、かつての英語では主語がない文もかなりふつうに使われていたのである。英語の主語の束縛が強くなった理由の一つは、度重なる戦乱（デーン人、ノルマン人の侵略）の中で、言語が入り乱れ、動詞と名詞の対応関係（屈折語尾）⁸を徐々に失ったことである。

屈折の消失と語順の固定化には相關関係のあることが知られている。「The father loves the child」で父が子を愛しているのか子が父を愛しているのかを決めるのは語順しかない。ドイツ語では「Das Kind der Vater lieben」なら子を父が愛していること、とわかる。定冠詞が中性名詞なら「das」「des」

われる」という動詞がある。これは無主語文になるが、意味上の主語がIでも三単現のsがついた。現在はI think (It seems to me) のスラングとして使われるようだ。現代英語において、非人称構文はas節の中に化石的に残っている（安藤2002, p.108）。

I shall act as seems best. (最善と思われるように行動します。)

I cannot agree with you as regards that. (その点については賛成できません。)

Her words were as follows that. (彼女の言葉は次のようであった。)

。語（の一部）を変形して文法機能を示すことを屈折という。ヨーロッパの言語の多くは屈折語である。なお、こうした屈折もニカワも持たず、単語（意味上の単位）が孤立して並んでいるのが孤立語である。英語は今やbe動詞以外の動詞は三単現を残すのみ、過去形は屈折せず、人称代名詞以外の名詞も屈折せず、孤立語に近づいているといえる（中国語も孤立語である。高校で、英語と漢文が似ていると言われたひともいるのではないか）。

なお、日本語にも知らない（未然）、知り・ます（連用）、知る・こと（連体）、知れ・ば（已然）、知る・う（推量）「文語は知ら・う（未然）」という、母音を使った動詞の活用がある。これが印欧諸語の屈折と異なるのは、主語との対応がないことである（人称代名詞の性や数とも無関係）。「話題・説明」の特徴をよく示している。

「dem」「das」男性名詞なら「der」「des」「dem」「den」「の」「の」「を」と変化するの⁹で、語順に関係なく「der Vater」は「父が」となるからだ。格関係を語順に頼らなくてもいい分、語順が別のことに使える。ドイツ語の平叙文は動詞が二番目にくるV2語順を取るのだが、一番目の語は主語ではなく話題をあらわす。あえて訳してみるなら次のようになるだろうか。

Das Buch lese ich. (その本は私が読む。)

Ich lese das Buch. (私はその本を読む。)

英語もかつてはV2語順を持っていた¹⁰。しかし、一二〇〇年頃に単数と複数を区別できなくなってV2語順を失い、顕著な「主語・述語」型に変化したとされる¹¹。同時期に非人称構文が虚辞の「it」を取るようになっていく。SV語順が固定化し、どんな文でも動詞の前に主語を置かなければならないと感じられるようになったからだろう。

これまで、ある言語のなかで主語がどの程度幅を利かせているのかを、日本語と英語の例を挙げながら簡単に説明した。この切り口を利用して、私はこれから中動態を考察しようと思う。読者もお気づきの通り、私は『中動態

』。「（それは）私です。」は中世までIt am Iだった。主語はIで、話題のitが文頭にくるV2語順だったのだろう。しかし、文頭に来るものは主語と感じられるようになり、itが主語と解釈されて現在のIt is me.という表現になった。

。日本語などの話題卓越言語を視野に入れつつ、英語が話題卓越言語から主語卓越言語へと変化する過程で「空主語」（無主語文）を失ったことを論じている。古英語も屈折語尾はそれほど豊かでなく、「空主語」が話題卓越によるという指摘は興味深い（縄田2012）。

の世界』に大きな刺激を受けて本論を着想した。けれども勉強を進めるにつれ、國分とは少し異なった視点で中動態を眺めてみたくなった。國分が扱っているのは基本的にヨーロッパの言語の事情である。そこでは、文法としての中動態は失われ、能動態と受動態の表舞台の裏方から「抑圧されたものの回帰」として顔を出しているという扱いである。それはヨーロッパの言語の事情としては正しいが、日本ではずいぶん様子が違うのではないか。

私はこんな風に考えている。日本語の表舞台は今の今まで中動態の独擅場であり、ようやく能動態と受動態の突き上げが始まったところなのだ。ところが、それがあまりにも身近すぎて、ついさっきまで中動態まみれだったことに私たちはうまく気づけずにいる。そう、それはまるで「空気」のように……。

態と他動性

態 (Voice) とは、どの動作主 (Agent) の視点をとるかで文の形が変化する現象である。たとえば、キラさんがエルさんを殺すという内容を、キラを中心に述べるか、エルを中心に述べるかによって、

キラがエルを殺す。 Kira kills L.

キラにエルが殺される。 L is killed by Kira.

このように二通りの文を作ることができる。日本語では、が格 (主格) をキラにとるかエルにとるかで、を格 (対格、直接目的の標示)、に格 (与格、間接目的の標示) が交代し、動詞の語尾が「れる」に変わる。英語では、目的語を主語に移し、動詞を過去分詞に変えて be 動詞の後に置き、前置詞「by」

の副詞句で動作主を示す。

基本文を規則的に変形することで、同じ意味を持つが形の異なる文が得られる。これは生成文法の一歩基本的な発想 (限られた基本文形から規則的に様々な形の文が「生成」する) であった。それでは、能動態の他動詞文を目的語の視点から文を読みかえることをもって受動態を定義できるとひとまず考えてみよう。すると、大量の「ひねくれた」受身文がとびこんでくる。まずは英語の例¹¹⁾。

Every boy loves a girl.

A girl is loved by every boy.

能動文は、一人一人の男の子がそれぞれ別々の女の子が好き、と読むのがふつうである (どの男の子もある一人の女の子が好き、ともとれる)。ところが受動文は、一人の女の子がたくさんの男の子に好かれている、としかとれない。「every」には、一つ一つという意味と、一つ一つのどれもみなという意味があるが、「a」は一つ一つという意味だけである。主語には話題化の機能もあるので、「every」を主語にとるならどちらの意味にも取れるのだろう。

1 inch is defined as 2.54 cm.

11) この例文は、チョムスキーが標準理論を改める (受動変形を放棄した) きっかけになった反例。なぜこれが強力な反例なのかと言うと、「 Δx , Δy , Rxy 」と、「 $\exists y, \forall x, Rxy$ 」(ただし x は集合「boy」の要素、 y は集合「girl」の要素、 Rab は「 a が b を愛する」という二項述語) の前者を能動文が、後者を受動文がとるからであろう。態の変換が全称記号と存在記号の順番を入れ替えるという、巧妙な例である。

典型的な、状態を示す受身文である。一般に、副詞句であることからわかるとおり、「by」で動作主を示すことは必須ではない¹³。そもそも受身文全体において、動作主を明示的に示している割合は低い¹³。「by」を強調するのは、目的語と主語を入れ替えたのだから、どこかに主語を置く場所があるはずだと考えているように思える¹⁴。

My heart is broken.

この文に「by my sweetheart」などと動作主をつけては大変である。これは、心を叩き壊されるという被害を表しているのではなくて、「心が砕け散る」「深く傷つく」という自発的な感情を表している。しかし、こういう負の感情は自分が望んで湧き上がるものではないので、受動態が適しているのだ (disappointed, shocked など)。これは感情表現一般の特徴である。

I am interested in English.

He is surprised at the news.

¹² 公文書で受動態が多用されると行為主体が明確にならないという問題がよく指摘される (庵 2013)。

¹³ 有名なイエス・ペルセンの統計では、英文の受動態の八割程度が動作主を明示しない。(Jespersen 1924 “The Philosophy of grammar.”)

¹⁴ Maximum velocity was determined with an anemometer. を by an anemometer にする¹⁵。風速計が自ら進んで最高速度を測定したというニュアンスになる。(綿貫、ピーターセン 2006, p.109) by を取れるのは動作主だけである。(Shibatani 1985, p.832)

興味を持ったり驚いたりしているのは主語の「I」や「he」である。これがなぜ受動態になるのかを、能動態からの規則的な変形で説明するのは困難である(むしろ、こうした受動態をもとに「interest」や「surprise」の能動態が派生しているくらいがある)。なお、やや特殊な例として完全に自動詞化した「be born」がある¹⁵。

そして最後に、能動文を規則的に変形しても受動態にできない他動詞がある。

*A car is had by me. (I have a car.)

*Enough money is lacked for the project. (The project lacks enough money.)

能動文の変形として受動文を定義しようとする冒頭の考え方では「受身」という文法をとらえることができない。とはいえ、英語やその他ヨーロッパの言語において、能動文の主語・他動詞・目的語はかなり明瞭に捉えられる。だから受動態を、目的語を主語に移す変形と考えても比較的問題が少ない。

¹⁵ bear (産む) の過去分詞 borne から e が落ち、be born で熟語化したのだろう。能動文と受動文では微妙にニュアンスが異なるようだ。以下、ルシナス英和辞典の例文から。

She bore three children. (*Three children were borne by her.)

Margaret was borne by the queen. (*The queen bore Margaret.)

なお、後者は Margaret was born to [of] the queen. がよい。

ここで、さらに他動性について検討したい。先に受動態を、他動詞の能動態を変形することで定義してみたが、反対に、受動態がつくれるかどうかで動詞の他動性を判断する議論もあるからである。

英語を見るかぎり、その動詞が他動詞か自動詞かは構文的にたやすく見て取ることができるように思われる。動詞の次に目的語の名詞があれば他動詞だ、というわけである。しかし、先に見たように所有の意味での「have」が受動態を取れないことはこの定義に再考を迫る。

他動性があくまで性質であり、形の上から見て取れる構文的なものではないことは英語を見てもなかなか分からない。それは、他動詞文に目的語をはっきり見て取れ、その目的語を主語に移せば受動態になる、という形態的・構文的な特徴を「主語・述語」型言語が持っているためだ。だが、主語の概念に依存した定義は「話題・説明」型の言語でも通用するのだろうか。結論を述べると、通用しない。様々な言語を通覧するなら、他動性は目的語や受動態の有無で形式的に決めることができず、むしろ意味的に決める(discourse-determined) ほうがいいのである。

窓が開いている。(自動詞)

窓が開けてある。(他動詞)

三上も、直接受動文を作れるものを能動詞、作れないものを所動詞と定義したが、後に「受身の成否は難易の程度問題であって、それを動詞の分類の基準とすることはできない。わたしは前に、この基準で能動詞と所動詞を設けたが、それは無理だった。」として撤回している。フーパーとトンブソンとは逆に、受身の有無が程度問題であることから他動性を考察しているのが面白い。

が格を主語の目印(主格)とすると、目的語を探そうとしても見つからない。英語の定義は完全に無力である⁵⁾。

英語でも、細かく見ていくと自動詞と他動詞の境は決してはっきりしたものではない。次に挙げるのは、ルシナス英和辞典の「bump」にあった例文である。BUMP OF CHICKENで存じ、ぶつかるという意味である。

Something bumped against me. (自動詞)

He bumped his head against the wall. (他動詞)

前者を「I was bumped against.」と書き換えてあまり違和感はないように思われる。ふつう「bump」は人を主語にとる(目的語も人をとると、出会うという意味になる。ばったり出会った。We bumped into each other.)。あえて「something」を主語にとることで、ぶつかってこられたというニュアンスがでてくる。一方で、後者を「His head was bumped against the wall by him.」と書き換えるのにはかなり無理がある。元の文が言いたいのは、自分の頭を壁にたたきつけたということではなく、壁にぶつかった場所が頭だったということのはずだ。動作は自分の頭に向かっているのではなく、壁に向かっている。だから、自分の頭を主語にした受動文はおかしくなる。日本語でも、を格が場所を示すときはうまく受身にできない。

* 頭が彼にぶつけられた。(彼が頭をぶつけた。)

試みに英訳しておく。

The window is open.

The window is still had opened.

*宇宙がガガーリンに飛ばれた。(ガガーリンが宇宙を飛んだ。)

「AがBをくする」を「BがAにくされる」と変形できない例は他にもたくさんある。(部下が失敗を謝る。*失敗が部下に謝られる。)また、に格をが格に移す受身文もつくれる。(仕事を彼に任す。彼が仕事を任せられる。太郎が花子に近寄る。花子が太郎に近寄られる。)を格をとるのが目的語だと単純に言えないのは日本語も同じだ。

フーパーとトンプソンは、他動性を一〇の要素に分けてそれぞれの得点の総合的な評価をするという方法をもとに、他動性が自動性へと意味的に連続していると考えている。(A)動作主と働きかける対象とがそろっているか。(B)動作の激しさ。(C)動作が完了しているか、まだ途中か。(D)行為の始まりから終わりがはっきりしているか漠然としているか。(E)目的をもった動作かどうか。(F)肯定文か否定文か。(G)現実的か非現実的か。(H)動作主がどう働きかけるか。(I)対象が動作を受けて変化するかどうか。(J)対象が具体的・個別的か、一般的・抽象的か。ここまで詳細な評価をしなくても、他動性について一般に言えるのは、動作が相手に及び、かつ相手を変化させる¹⁹ということである。そうした動詞として、壊す、作る、食べる、曲げる、与える、隠すなどが挙げられるだろう。こうした典型的な他動詞から、叩く、持つ、戦う、話す、分かる、付く、行く、開く、な

¹⁸ (P. J. Hopper & S. A. Thompson 1980)

¹⁹ 目的語をとったとしても、相手を変化させなければ他動性は薄れる(角田 1992, p.65)。先にあげた have (を持つ) と lack (を欠く) の受身がつくれないことを思い出してほしい。車を所有することで車が変化するわけではないし、十分なお金がないことはお金に対する動作ではない。

どのように、徐々に他動性が薄くなり、動作の対象が捕えがたく、行為が動作主の中で完結するというグラデーションを描くことができる。他動性のない動詞の典型は、死ぬ、眠る、降る、生きる、などであろう。日本語の場合、こうした動詞の性質は格関係に反映している。他動性の強い動詞は、を格を取る傾向にあり(を殺す、を作る)、と格(と戦う、と話す)、に格、へ格(に付く、へ行く)、で格(で死ぬ、で降る)にしたがって他動性が薄れてゆく。とはいえこれもあくまでそういう傾向があるというだけである。格関係で他動性を定義しようとするのではなく、他動性から格の機能を考察した方が有益であろう。フーパーとトンプソンは、世界の様々な言語が他動性を形態や構文にどのように反映させるかを調べている。

ところで、バンヴェニストはサンスクリット語とギリシア語で共通する、能動態だけをとる動詞と中動態だけをとる動詞を列挙し、それを対比して次のように述べている。

主辞[主語と過程との関係にかかわる一つの区別が現れてくる。能動態においては、動詞は、主辞に発して主辞の外で行われる過程を示す。これとの対立によって定義されるべき態であるところの中動態では、動詞は、主辞がその過程の座であるような過程を示し、主辞のあらわすその主体[動作主]は、この過程の内部にあるのである。²⁰

そもそも他動性 transitivity とは、動詞によってあらわされる行為が自ら

²⁰ (バンヴェニスト 1983, p.169) は引用者が補足、強調は引用者)

を越えて他のものに及ぶ (transitive は、trans 越えて ire 行く²¹) ことを指している。バンヴェニストが発見したのは、能動態と受動態の対立に先立つ「他動態と自動態の対立」(?)であつたと読めば、とても腑に落ちる²²。バンヴェニストが動詞の意味を踏まえてこの結論を引き出しているのは、フーパーとトンブソンのアプローチとも整合的である。惜しむらくは、態と他動性の関係を議論しているということにバンヴェニスト自身がはつきり気づいていないように見えることだ。それに、この結論にはちよつと不思議なところがある。他動詞は受動態をつくり、自動詞はつくらない。ところがその反対に、能動態のみをとる動詞が他動詞で、受動態の先祖である中動態のみをとる動詞が自動詞なのだという。いったいこれはどうなっているのか。

バンヴェニストの主張についてはあとできちんと検討するが、自動・他動と能動・受動について交通整理はしておこう。フーパーとトンブソンの「他動性仮説」によれば、

ある言語で、二つの単文が次の点で異なっていたら、その一方がより他動性が高い。先に上げたAからJの特徴のいずれかに従って他動性が高いこと、さらに、その文のどこかに文法的・意味的な違いが含まれていること。²³

²¹ ちなみに分析哲学では推移性 ($([a \rightarrow b] \wedge [b \rightarrow c]) \rightarrow [a \rightarrow c]$) を transitivity といい。

²² 金谷ははつきりと、バンヴェニストの外態・内態は他動性・自動性と同一であると指摘している。(金谷 1998, p.62)

²³ (Hopper & Thompson 1980, p.255)

すなわち、他動性の意味的な特徴を比較し、ついで、形の上でその特徴を反映する違いを突き止めることで、他動性を判定するのである。先の例でやってみよう。「窓が開いている。」と「窓が開けてある。」を意味的に比較する。開くのは自発的だが、開けるのは人の動作があり、「窓を開ける」と言える。また、「ている」には状態の継続、「てある」には完了した結果のニユアンスがある。A・C・E・Iの点で「窓が開けてある。」が勝っており、他動性が高い。

このように、他動性と自動性は意味的な対立である。対して、能動態と受動態は形式的な対立である。英語では他動性の強弱と受動態の有無がよく一致するが、他にも他動性を反映する形態的・構文的な要素はいろいろ考えられる。これを、能動態だが「意味的には受動態」などと言ひ始めると話がこんがらがってくる。意味的にはまず他動性を考え、しかる後に態やその他の形態的・構文的な考察をするべきである。

話を戻そう。ヨーロッパの他の言語はよくわからないが、少なくとも英語については、なぜ能動態と受動態の対立が顕著になったのかを他動詞の発達から説明できるように思われる。古英語では、自動詞の数は他動詞や自他両方の用法を持つ動詞よりもはるかに多かったと考えられている。ところが中

²⁴ 開 *ki-* ます・開 *ke-* ます、のように日本語には自動詞と他動詞が対をなすものが多い。英語にも *sit* (据わる) *set* (据える) *lie* (横たわる) *lay* (横たえる) という自他と母音の交代があり、ドイツ語の *sitzen* (据わる) *setzen* (据える) *liegen* (横たわる) *legen* (横たえる) とも共通している。

古英語には *brinnan* (燃える) *bernan* (燃やす) *springan* (跳ね上がる) *sprengan* (跳ね上げる) など、うった自他の対をなす動詞が多くあった。これらが *burn* や *spring* として同形になることで他動詞化が進行したと言え

世から近代にかけて他動詞が大量に増加し、英語は今では他動詞表現を中心とする言語になっている。

他動詞が発達した原因の一つとして、冠詞の屈折を失ったことで与格が対格と区別できなくなり、動詞の目的語はすべて対格（直接目的語）とみなされるようになったことが挙げられる。現在のドイツ語を想定すればよいが、古英語の名詞は冠詞と語尾が主格（が格）・属格（の格）・与格（に格）・対格（を格）に対応して変化した。一例を示すと、「*the/that end*」（男性・単数）は「*se ende*」「*þæs endes*」「*þæm ende*」「*þone ende*」と格変化した²⁵。しかし、中世には属格の語尾を除いて格の変化を失い、「*pe ende*」「*pe endes*」「*pe ende*」「*pe ende*」になった²⁶。この結果、与格と対格の混同が起こった。例えば興味深いのが「*help*」である。

The man helps the child. （現代英語）

Se mann healp þæm cild. （古英語）

Der Mann hilft dem Kind. （現代ドイツ語）

古英語では「*cild*」が与格である。「男がその子を助ける」ではなく、「男はその子にもとって助けになる」*the man gets helpful to the child.*」と

²⁵ 「*p*」はソーンといひ、発音は「*θ*」（歯摩擦音）。ちなみに現代ドイツ語では *das ende, des endes, dem ende, das ende* と格変化する。 *ende* は中性。
²⁶ 古英語は男性・中性・女性・単数・複数・主格・属格・与格・対格・具格による複雑な名詞の屈折を有していた（Wikipedia 「英語の冠詞」の古英語の定冠詞システムを参照）のだが、そのほとんどが中世までに失われた。この結果、属格と名詞の複数の区別がつかなくなる（どちらも語尾に *s* をつける）ことでも他動詞化が進行した。

う言い方なのだ。ドイツ語でも「*helfen*」が自動詞なのは注目に値する²⁷。他にも「*answer*」「*follow*」などが与格をとり、ドイツ語「*antworten*」「*folgen*」も自動詞である。

さらに、英語にはドイツ語やフランス語と比較しても自動詞と他動詞の形が同じものが多いという特徴がある。「*The door opens. / He opens the door.*」「*A cloth spreads. / He spreads a cloth.*」「*The glass breaks. / He breaks the glass.*」²⁸など、枚挙にいとまがない。もともと自動詞の用法しかかった動詞が他動詞と同じ形になることで、自動詞に他動詞が上書きされることも多かったと考えられる。おそろしい事情に即応して「*He sells ice cream. / Ice cream sells well.*」「*I read this book. / This book reads easily.*」のような表現にも違和感があまりないのであろう。これは逆に、他動詞に自動詞が上書きされた例と言えるかもしれない²⁹。日本語なら、「アイス売る。／アイス

²⁷ 國分的に言うなら、自分の「能動性」を発揮するだけでは人を助けることができない、その人の助けになるという関係性が生まれることが大切なのだということである。 *Can I help you?* は *Kann ich dir helfen?* 君の助けになりますか？であって、私は君を助けられますか、ではない。

²⁸ ドアが開く。／ドアを開ける。布が広がる。／布を広げる。ガラスが割れる。／ガラスを割る。

Die Tür geht auf. / Er öffnet die Tür. Ein Tuch breitet sich. / Er breitet ein Tuch. Das Glas bricht. / Er bricht das Glas.

La porte s'ouvre. / Il ouvre la porte. Un tissu se répand (s'étale). / Il étale un tissu. Le verre se casse. / Il casse le verre. （ただし *casser* には自動詞用法あり）

²⁹ 形の上で受動態をまったくとらない以上、これを能動受動文と呼ぶことに私は賛成できない。対応する訳を「アイスがよく売られる」や「その本は楽に読まれる（読まれやすい）」としては変である。それに、意味が受動的かどうか微妙で、売り手が意図しなくても自然と本が売れてゆくという自発

イスがよく売れる。「この本を読む／この本は楽に読める(読みやすい)」のように他動性に合わせて動詞の形が変化するところである。

それ以外にも、英語は動詞の他動性を高めている。ここで取り上げるのは *that* 節をとる非人称構文の人称化である。中尾と児島は、動詞の取る補文がその動詞の他動性によって決まることを指摘している³⁰。

補文に *that* 節をとるときは、完全な形の文に「*that*」が付されているだけで、節の内容は主文の主語とは関係ない (I remember that he said so.)。しかし「*to* 不定詞や現在分詞では文の形が崩れ (I remember him saying so.) 節内の主語は主文の主語が働きかける対象という位置づけになる。もちろん、*that* 節を取る限り受動態にはできないが、それが分解されて目的語に変われば受動態を取る可能性が生まれる。

例を挙げよう。「*like*」は古英語では「*lician*」(喜ばしい)であり、「*methinks*」のように非人称構文で *that* 節をとることができた。敢えて現代英語に訳すなら「*it is agreeable (to me) that...*」のような表現である。目的語はその喜ばしさの受け取り手であり、与格で表せた。しかし一四世紀以降、*that* 節を取ることは少なくなる。

God liketh thy requeste. (あなたの求めは神に喜ばれる。) チョーサー
Whether it like me or not, I am a courtier. (好ましかろうとなかろうと、
私は宮廷人だ。) シェイクスピア

の解釈にして The door opens automatically. のような自動詞表現と対応させたほうがいいと思う。

³⁰ (中尾・児島 1990, pp.102-3)

格変化を失っているが、文頭の「*god*」や「*it*」は与格である。ただし、シェイクスピアには「*I like O*」の用法もある。*that* 節ではなく *to* 不定詞をとるようになると、与格にあった喜ばしさの受け取り手は喜びを感じる主体として主語の位置に移動した³¹。もちろん、格変化を失って主格と与格が区別できなくなったことも重要である。チョーサーの文は「神があなたの求めを喜ぶ。」とも読める。

この現象は使役動詞についても言える。「*make*」は古英語では使役動詞としてほとんど用いられなかったが、中世以降「*make O that* 節」「*make O to* 不定詞」の形でよく用いられるようになり、最終的に「*to*」が落ちて「*make O* 原型不定詞」という *SVOC* の形に至った。補文の内容が完全に主語の支配下に入ったというわけである。この動向は、「*have*」や「*get*」において現在も進行中である。

非人称構文についても少し掘り下げておこう。安藤は、「非人称構文は、自然界・社会・個人の心理に生起するもろもろの現象をあたかも自然現象のように表現するもの」であり、動作主を考えないので、無主語あるいは形式的に「*it*」を主語にとる、と指摘している³²。ここで、かつての非人称構文の働きを現在では受動態が担っていることは強調されてよい。例えば「The president decided tax increase.」なら、大統領から増税の指令が発せられて

³¹ 接頭辞が与格と対格と主格で同形となったこともこの変化を後押しした。

³² (安藤 2002, p.106)

非人称構文「*me were better to go*. 行く方がよかったようだ」は「*I were better to go*.」のように主格として解釈される場合と、「*It would be better for me to go*.」のように *to* 不定詞の意味上の主語として解釈される場合があった。

いる。「The tax increase was decided by the executive order.」では、増税が大統領令によって決定されている。しかし、官僚たちがよく利用している受動態の主な働きは、行為者をぼかして、「The tax increase was decided.」と表現すること、つまり増税という出来事に焦点を当て、それが決まった、これから起こるのだ、とその様子を説明するところにある。一般に、受動態は他動性の薄い構文である。つまり、状態や出来事の描写に適し、行為者の特定や責任の追及には不向きである。非人称構文の人称化とともに、英語は受動態を発達させたのである。

とはいえ英語以外の言語に目を向ければ、英語は他動性の発達とともに受動態の可能性を極端に狭めてしまったことがわかる。なぜなら、多くの言語には自動詞の受身文が存在し、かなりの頻度で使われているからである。受動態を作るかどうかは他動性の基準としてある程度有効だというのは、英語特有の事情である。

ラテン語の自動詞の受身は非人称的な表現で用いられる。

Sic itur ad astra. (人は星へ向かう(天に昇る)。) アエネアス³³

itur は「行く」を意味する *eo* の直説法・受動相・現在・三人称・単数(ラテン語は主語の人称と単複に応じて動詞が整然と活用する)。*sic* は「このようにして」という副詞、*ad* は場所の前置詞、*astra* は星である。無主語文だが文脈から主題が人間であることがわかる。そこで、「人は死すべきものだ」のような一般的なことがらを述べるときに受動態(無主語文)を用いる。

³³ <http://www.kitashirakawa.jp/taro/?p=937> (2017/11/06 閲覧)

ドイツ語でも事情は同じで、自動詞の受身が非人称的な表現で用いられる。

Es wird gefeiert, es wird gesungen, es wird geweint. (祝って、歌って、泣いている。)³⁴

wird は受動の助動詞 *werden* の直説法・現在・三人称・単数形。ドイツ語の自動詞の受動態は、「祝われる」ではなく「祝う」と訳す。これらは被動性の表現ではない。文中に動作主を出さず、できごとをそのまま表現するために受動態を使っている³⁵。

トルコ語でも、非人称的な自動詞の受身によって動作主を特定しないようにする。

Ada da her akşam yüzdür. (島では毎晩人が泳いでいる。)³⁶

ada は島、*da* は場所(at the island)、*her akşam* は毎晩(every evening)なので、この文に主語はない。これも「泳がれる」ではなく「泳ぐ」と訳す。

³⁴ ベルリンの壁崩壊のときの様子。

³⁵ <http://www.coelang.tufs.ac.jp/mt/de/gmod/contents/explanation/072.html> (2017/11/11 閲覧)

³⁶ *helfen* のように与格を取る自動詞の受動態は、与格が与格のまま文頭に來るので無主語(無主格)文となる。

³⁶ *Dem Kind wird vom Mann geholfen.* (その子は男に助けられる。)

http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ilt/contents/luncheon_handouts/luncheon20150128aoyama_resume.pdf (2017/11/17 閲覧)

トルコ語の自動詞の受動態では、属性や習慣を表す中立形 (iii) では *yüz-er* を用いるのが普通である。それによって、その島はいつも人が泳ぐ状態にある、という表現にする。

日本語は「話題・説明」型であり、そもそも主語を立てる必要がないので、主語を消すための非人称的な受身は存在しない。日本語の自動詞の受身は迷惑のニュアンスを帯びるものが多い。この理由についてはあとで考察する。

雨に降られる。(雨が降る。)

親に死なれる。(親が死ぬ。)

以上をもとに、もう一度英語の受動態を見直しておこう。受動態の説明を能動態の他動詞文から始めると、どうしても他動性に引きずられてしまう。そこで、思い切って受動文から説明することしよう。英語における受動態の基本は、SVC である。C (補語) とは名詞や形容詞が補われる位置である。iii) に、「decision」とか「mindful」とか動詞を名詞化・形容詞化した言葉ではなくて、動詞そのものを使った表現を入れたい。方法は現在分詞と過去分詞の二通りある[※]。元が SVC であるから、状態を表現するのに適しているのも当然である。そこに他動性の低い動詞の過去分詞をもってくれば非人称的な表現になるし、他動性の高い動詞の過去分詞をもってくれば、被動性も

[※] 現在分詞と過去分詞は、進行と完了というアスペクトの対立と考える。被動性が完了(されてしまった)で表現されることは北京語と共通していて興味深い。他動性を帯びた完了では *have* を用いる (現在完了)。古英語では、自動詞の完了形に *be* が、他動詞の完了形に *have* が使分けられていた。

Winter is gone. (冬が過ぎ去った。) のような表現が残っている。

うまく表現できるのである。とはいえ、被動性を強調する以上、その動作主が気になる場所である。そのときは、「by」の副詞句で動作主を補おう[※]。

英語における能動態の他動詞文は、その動詞が持つ他動性によって、主語に示される行為者が目的語に表れた対象に向かって働きかけているという方向性を持つ。受動態は、反対に、主語や話題となっているものが行為者から働きかけられている、という方向性を持つ。これが能動 *active* と受動 *passive* という言葉の意味だろう。他動詞を利用した被動性の表現は受動態の一つの働きである。しかし、被動性をもって「意味的には受動態」のように考えるべきではない。それは受動態の受け持っている働きの、あくまでもその一つに過ぎないのだ。

能格言語

能動態と受動態の対立について、もう少し踏み込んだ考察を紹介して締めくくりにしよう。

能格言語という、一見奇妙な格組織をもった言語がある[※]。能格言語では、

[※] 日本語の他動性を利用した受身文は、「〜に…される」という形を好むが、「に」には「彼にもらった本」「地震による津波」のように起点を表す用法がある。動作の起点を示す、日本語の「から」に相当するヨーロッパの言語の前置詞は、ラテン語の対格支配の「ad」、ドイツ語の「von」、フランス語の「de」、英語ではかつては「fram (現在の from)」と「of (off の同根)」であったが、現在は「by」という近接の前置詞が選ばれている(池上 pp.122-5)。

[※] ゲルニカがある。スペインのバスク地方で話されるバスク語が有名である。驚くべきことにバスク語は印欧語ではない。能格言語は他にも、アボリジニやイヌイットの言語、黒海とカスピ海に挟まれた地域のコーカサス諸語、中南米のマヤ諸語、南太平洋のポリネシア諸語など、世界各地にみられる。なんと日本の喜界島方言にも能格組織があったらしい(角田 1992, p.36)。

自動詞の主語と、他動詞の目的語が同じ格で表される。これを絶対格という。そして他動詞の主語を、能格として有標化する。あえて英語で表現するなら(能格 : he, ye 絶対格 : him, you)'

Him dies. You die. (絶対格 - 自動詞)

Ye kill him. He kills you. (能格 - 他動詞 - 絶対格)

といったところか。ちよつと面白いのだが、古英語の二人称複数の主格は「ye」で対格が「you」だったので、それを踏まえてみた。多くの能格言語では絶対格は無標で、能格が有標である(興味がある人は Wikipedia の「能格言語」の記事を見よう)。もし日本語で、自動詞の格と他動詞の格がなくなり、他動詞の格だけが残ったと考えてみるならば

彼 死ぬ。あなた 死ぬ。

あなたが彼殺す。彼があなた 殺す。

という格組織になる。このニュアンスを掴むのは難しいが、池上は次のように説明している。まず、自動詞の表現を考えよう。B が死ぬ、「B die」である。つぎに、もうひとり A に登場してもらい、他動詞の表現「A kill B」を考える。これを、A が B を死に至らしめる、という使役として解釈してみよう。すると「A make B die」⁵ A が[B die]というできごとをつくりだした、

⁵ この設定は(角田 1992, p.32)による。日本語は話し言葉ではよく格が抜ける(「彼死ぬかな」「あなた、彼殺すよね」)ので参考にされたい。

という表現になる。この「B」の位置が絶対格である。他動詞を自動詞+使役としてとらえるのなら、なぜ自動詞の主語と他動詞の目的語が同じ格をとるのかを理解できるというわけである。

やや変則的な例であるが、「Ice cream sells well.」や「This book reads easily.」も思い出してほしい。このように他動詞が自動詞化したときは「well」や「easily」といった副詞を伴うので、暗に動作主が示唆されている。「Someone sells ice cream.」「Someone reads this book.」の他動詞が動作主を明示しなくなった結果、「A make」の部分が落ち、ちよつど能格言語と同じ絶対格の発想によつて目的語が主語の位置におさまったのである。他動詞が自動詞+使役なら、他動詞から使役を引き算すれば自動詞になるというわけだ。

また、他動詞から「A make」を引き算するという点では受動態も同じである。その逆に他動詞の受動態を能動態に戻す操作には、能格言語において自動詞の主語が他動詞の目的語にくると同じふるまいが見られると言える。あえて先の例に当てはめてみるならば、

Him is killed.

Ye kill him. (by ye [Him is killed])

⁶ この現象が日本語にも見られることは注目に値する。日本語は「富士山が見える(自動詞)」「富士山を見る(他動詞)」のように、自動詞と他動詞が対になっているものが多い。しかし、「死ぬ」のように対になる他動詞を持たない自動詞もある。それをあえて他動詞にするときは、使役の助動詞「させる」を使って「死なせる(自動詞+使役)」の形にする。

まず受動文を考え、そこに能格成分「A make」を入れることで他動詞をつくるのである。こう考えると、受動態の「by」は能格と似ている。

一般に、語形成は能格的であることが知られている⁴²。日本語でも、自動詞の「雨降り（雨が降る）」に対して他動詞の「魚釣り（魚を釣る）」であって、「魚釣られ」ではない。『騎士団長殺し』で殺されるのは騎士団長である。これらも他動詞から「A make」を引き算した表現である。ということは、「父が魚釣りする」「子どもが人形遊びする」「彼は本読み中だ」などは能格言語の発想である。先の例の類推でいけば、「彼殺し」から「あなたが彼殺しする」という表現をつくる。

それでもまだピンとこないかもしれない。こんどは、能格のニュアンスを私なりに考えてみたい。「I love you.」をなんと訳しますか？ 高校生にそう聞くと、「私はあなたを愛します」という答えは思いのほか少ない。「君が好き」とか、それに類する答えが返ってくる。そこで重ねて、「君が好き」の主語は？と聞く。主語は「君」だろうか。おかしい、「君」は目的語のはずだ。でも「君が好き」って変じゃないですか。変なのである。「好き」は形容詞なので（好きな人、と名詞を修飾する）、文法的には、「君を好く」か「君を愛す」と言うことになる。要するに、高校生の訳は英語の動詞「love」を日本語の形容詞（学校文法的には形容動詞）「好き」に言い換えていたのだ。「君が好き」をあえて英語に訳すなら、「For me, you are beloved.」といったところか。この「For me」が能格にあたる⁴³。

⁴² (柴谷 1986) 英語なら ice breaking, cake cutting, bird watching など。

⁴³ It's easy for me to get up. のように to 不定詞句に対して for が意味上の主語を示すことも似たような発想かもしれない。これがともとも非人称表現から派生したことも示唆的だ。非人称表現の与格は能格に通じると言えまいか。

次に、「私は納豆が食べられる」の英訳も考えてみよう。普通は、「I」を主語にとり助動詞 can を使って「I can eat natto.」という「私の能力」の表現にする。しかし、日本語研究者アルフォンソの手になると言われる有名な訳によれば、「As for me, natto is eatable.」つまり、納豆の「食べられる性質」という表現にするのである⁴⁴。たしかにこの方が元の文の形に近い。「私」は話題化されて補足的に補われており、この「は」が示すものはまさに能格である。このように、日本語は可能の表現を、人間を主語にとるのではなく物事を主語にとって表現する。「私は英語が出来る」は「I can speak English.」ではなく、私には英語がすらすら出て来る「English is speakable」という発想である。他動詞が形容詞に置き換えられ、他動性がなくなっていることに注意されたい。

池上と私の説明の勘所は、自動詞を中心に表現される（できごと）にその外から働きかける動作主を考えることで他動詞を説明している、ということにある。この発想と深い関係にあるのが、他動詞の間接受身である。

太郎が泥棒に財布を盗まれる。

この文を能動文に書き替えることができるだろうか。公式どおりなら、「泥棒」をが格にとるはずだが、「泥棒が…」で始めると太郎と財布の関係うまく表現することができない。「泥棒が太郎の財布を盗む。」と書くなら、その受動文は「太郎の財布が泥棒に盗まれる。」でなければならない。実は、

⁴⁴ 1) eat を eatable に直した操作は、受動態と同じく動作主の引き算である。このような語構成では英語も能格的な振る舞いをする。(柴谷 1986, pp. 81-2)

この受身文に対応するのは能動文ではなく、使役文である。

太郎が泥棒に財布を盗ませる。

盗まれていたり盗ませていたりするのは、泥棒ではなく太郎である。だから、泥棒を主語にして能動文を作ろうと思ってもうまくいかなかった。英訳するとこのことがよくわかるであろう。

Taro gets the purse stolen by a thief.

Taro gets a thief steal the purse.

起こっているのは、「泥棒が財布を盗む」という出来事である。それに対して、太郎がやられ放題であったなら受身になり、むしろそうなるように仕向けていたなら使役になる。「get O C」「have O C」は使役構文であるが、文脈によって受身に使うことができるのにはこのような理由が考えられるのだ。

また、自動詞の受身（いわゆる迷惑の受身）はこの間接受身の観点からとらえた方が理解しやすいだろう。念のため、対応する使役文も付しておく。

私は赤ちゃんに泣かれた。（私は赤ちゃんを泣かせた。）

母が息子に死なれた。（母が息子を死なせた。）

フランス語も同様で、Taro se fait voler le portefeuille par un voleur. の構文を使役にも用いることができる（むしろ faire は使役動詞として教わるはずである）。

泣かれたり死なれたりしているものは、赤ちゃんが泣いたり息子が死んだりしたことで影響を受けている私や母である。使役文では反対に、私や母が積極的に赤ちゃんを泣かせたり息子を死なせたりしている。自動詞の受身に迷惑のニュアンスが生じやすいのは、使役との対立があるからだろう。

中国語（北京語）の「被」を用いた受動態では、話題となっているものが強い影響を受けその結果こうなった（なってしまった）、という完了のアスペクトが加わる。このため、受動態は被害の文脈で好んで用いられる。

我被奇樂殺死了（エルはキラに殺された。I has been killed by Kira.）

「被」が受身のマーカー、そのあとにつづくのが動作主である。なお、動作主はしばしば省略される。結果に関心を寄せるため、日本語における間接受身が北京語にも存在する。⁴⁸

我被嬰兒哭得睡不着覺。（私は赤ん坊に泣かれて、眠れなかった。）

「得」の後が結果を示している。日本語の間接受身と同様に、話題の中心がその出来事によってどのような影響を受けたかを表すのだ。さらに、「殺

天候の受身に使役を使うと意味的に無理が生じる。「私は風に吹かれていた。／私は風を吹かせていた。」臆病風なら言えるかもしれないが。

フランス語も受動態に完了のアスペクトを含むことがある。Il est mort. は He has died. と訳せる。

⁴⁸（陳 2015）

死」のような複合動詞では自動詞文がつくれる。

Ⅰ 殺死了（エルは殺されて死んだ。）

このような自動詞文は、能動態だが受身の意味にとることができる²⁹。「被」を使った受動文は、自動詞文に動作主を付け加えることで受身の意味を際立たせていると考えた方がよいくらいだ。

いくつかの例を挙げてきたが、それらを要するに〈できごと〉（自ずと出て来る事）を自動詞で表す発想がまずあり、それに働きかける・働きかけられるものとして〈人間〉が補足的に示される。能格や間接受身の背後にはこのような世界観があると考えてみたいのである。

そして印欧言語もかつては能格言語の性格をより持っていたことがわっている。それは、英語の代名詞「*it*」が主格と対格で同じ形を取る、つまり絶対格と同じふるまいをするところにみえる。ドイツ語では、代名詞「*es*」（単数）と「*sie*」（複数）に加えて、中性名詞の「*das*」（定冠詞）と「*ein*」（不定冠詞）の主格と対格が一致する。三人称の代名詞や中性名詞は本来無生物であって、動作主になることがない。それらが動きの起点となる場合は非人称構文となったはずである。

このように考えていくと、能格型の衰退もまたある意味で非人称構文の人称化と言えるのではないかと思えてくる。能格言語のバスク語は、動詞が絶

²⁹ 「玻璃杯打破了」は文脈次第で、ガラスが割れたとも、ガラスが割られたともとれる。また、「他打破了玻璃杯」は自動詞文に「他」をつけて「彼がガラスを割った。」という他動詞に変えたものとみることができる（石村2005）。

対格と能格（さらに与格）によって複雑に活用する多人称性をもつ。そこから自動詞の絶対格と他動詞の能格とを「主語」として再分析するとき、動詞は主語のもとで一律に活用され、そして対格を取るか否かによって他動性が意識されるようになるであろう。ところで金谷は『英語にも主語はなかった』で主語の卓越が「する」言語としての英語を作り出したと主張し、國分は『中動態の世界』で動詞と主語を結び付けない非人称構文をより原始的な動詞のあり方だと考えている³⁰のだが、能格言語について、池上は金谷や國分とほぼ同様の歴史的理解を述べている。

もし印欧語がその歴史的な発展の途上で本来の能格型から対格型へという類型学的な変化を経たことが事実であるとすれば、そのような変化を生じさせたきっかけは、やはり〈する〉主体としての典型的な〈人間〉というものに文構成の中心的地位を与えるようになったということであろう。それによって、任意的な要素にすぎなかった能格は文構造を統率する主語として定立されるという根本的な変貌を経るのである。逆に言えば、〈人間〉中心の意識の発達が言語の性格を変化させる前の素朴（？）な段階では、言語は〈なる〉的なものとして現れる方が自然なのではないかとすら想像できるのである。³¹

私たちはいまや、中動態を考察するための包括的な見地に立っている。こ

³⁰ ただし、國分の依拠しているコラール『ラテン語文法』の記述は動詞が生まれる以前の憶測的な「名詞的構文」を仮定するもので、あまり根拠のある議論ではない。

³¹ 池上1981, pp.136-7)

ここで言語的思考の大きな二つの類型——〈人間〉（みずからするもの）を中心に置くか、〈できごと〉（おのずから出て来ること）を中心に置くか⁸²——を想定してみよう。そしてヨーロッパの言語、特に英語の歴史がたどってきた、〈できごと〉から〈人間〉へという歩みを仮定してみよう。その歩みは、非人称構文の人称化、他動性の発達、能格型から対格型へ、話題卓越から主語卓越へ、といった様々なレベルで進行してきた。そしてこの巨大な歩みの序曲にこそ、「中動態の衰退」という物語はふさわしいのではあるまいか。

世界の世界性

無主語の世界

ウラル・アルタイ語においては、主語の概念がはなはだしく発達していないが、この語圏内の哲学者たちが、インドゲルマン族や回教徒とは異なった目で「世界を眺め」、異なった途を歩きつつあることは、ひじょうにありうべきことである。ある文法的機能の呪縛は、窮極において、生理的価値判断と人種条件の呪縛でもある。

フリードリヒ・ニーチェ『善悪の彼岸』

私は冒頭で「主語・述語」型と「話題・説明」型という類型を紹介した。しかし、「主語・述語」は構文・形態的に分析可能な、目で見て分かる指標

⁸² 「自ら」を「みずから」と「おのずから」と訓じる区別は、「みずから為す動作」の動詞と「おのずから成る動作」の動詞を類別した本居春庭の『詞通路』にさかのぼる。「本居春庭の動詞表現機能分担」（寺村 1982, p.319）を参照。

なのに対し、「話題・説明」は文の内容を考慮する意味論的な基準⁸³ではないかと思われるかもしれない。ある程度はそのとおりだが、話題を示す「は」という指標もあり、主語にも動作主という意味的な側面があつて、事態は混沌としている。そこで、主語と話題の関係を、日英語を比較しながら定義していこう。

英語の主語と日本語の主語とでは、非常に大きな違いがある。これは、英語学習者（や日本語学習者）なら必ず押さえておかねばならないことだろう。以下、初歩的な確認をする。

日本語文のなかに主語を探すなら、主格に相当する「が格」を挙げることでできる。しかしが格は、対格に相当する「を格」や与格に相当する「に格」⁸⁴、そのほか「で格」「と格」「から格」「まで格」「より格」……などと比べて、語順と話題化において特別な振る舞いをしない。

しずかがのび太と電車で月見台から下北沢まで服を買いに行った。

この、「しずかが」「のび太と」「電車で」「月見台から」「下北沢まで」「服

⁸³ アリストテレスの命題論理では、命題とは主語・述語の組でなにごとかについてなにごとかを判断する（真偽を決める）ものだ。しかし、この主語・述語は実質的には話題・説明という情報構造のことを言っていると考えてもよからう。いずれにせよ、日本語では主語・述語は構文的に重要ではないが、それと命題論理の話とは関係ない。

⁸⁴ 主格 *nominative case*、属格 *genitive case*、与格 *dative case*、対格 *accusative case* あたりはヨーロッパの言語と日本語とでけっこう対応関係があり、使い勝手がいい。ドイツ語の「一」「二」「三」「四格」という呼び方は「が」「の」「に」「を」との対応関係がわかりづらくて良くないと思う。

を」あるいは「服を買いに」の語順は自由であり、聞き苦しいものもあるが六の階乗×二通りの文が可能である。さらに、「しずかは」「のび太とは」「電車では」「月見台からは」「下北沢までは」「服は」あるいは「服を買いには」を、聞き苦しいものもあるが適切な文脈を選べばすべて文頭で話題化することができる。ただし、が格とを格は話題化により「は」に置き換えることができ（「しずかがは」「服をは」とは言わない）、その点で他の格に対して優位に立っている。が格とを格の優位は、上の文から「しずかが」や「服を」を削った文が情報として何か欠けているように感じられるところにも表れている（適当な文脈を補う必要がある）。が格は基本的にすべての動詞が取ることができるが、『雪国』の冒頭のように、が格が欠けているからといって非文法的な文になるわけではない。「明日には着きます」「晩ご飯は食べた。」なども、が格がないので落ち着かない、とは感じられない。

「格助詞」とは、述語を補う補語格の助詞、という意味である。先の文では、「行った。」あるいは「買いに行った。」という述語を様々な格が補っている。主格だからといって特別な扱いが必要なわけではない。そして、必要に応じて格助詞で補われた述語は、副助詞「は」で提示された話題の説明として働くことができる。もちろん話題が読点や文脈で示されていることもある（「明日、着きます。」「もう食べました。」）。

このように考えるならば、日本語の中心は述語である。文の最後におかれた述語を中心として、その前に様々な補語格や副詞句が補われ、また述語の動詞の後ろに「れる・られる」「する・させる」「である・です」「だろう」「た」「ない」などの助動詞が接続して受身や使役や時制などを表現する。そして、その述語を大きく分類するならば、「君が、恋人だ（名詞文）」「君が、恋しい（形容詞文）」「君を、恋する（動詞文）」の三つの基本文がある。英

語の五文型とはずいぶん違っている。以上が日本語の基本的な構造である。

英語はこれとまったく異なっている。多くの言語で文頭は話題の場所であるが、英語は基本五文型の全てで強制的に主語が文頭に来る。命令や呼びかけのかたちでない限り、主語は形式的であつても必ず明示する。主語は、be動詞以外では三単現の「s」がつくだけだが、動詞を活用する。主語と述語がセットで立たなければ、英語は文を作れない。さらに英語は、動詞の後に目的語の場所がくるという点で特異である。同様の語順を取るフランス語の強い影響も考えられるが、人称代名詞以外では語順に頼らなければ格がまったくわからないからでもある。なお、「主語・動詞」に他動性がなく（少なく）、続く単語を目的語と取れないときは、それらを一括して「補語 complement」としてまとめている。典型的にはbe動詞や知覚動詞に対応して、様子や状態を示すものが補語に入る。こうした補語の地位も、「主語・動詞・目的語」という構造を際立たせるものだ。この構造は英語を説明するには大変便利である。しかし、英語由来の「主語 subject」と「目的語 object」という構文的な概念に普遍性があるとは言いがたい。

英語の特徴について少し補足しておく、「主語・動詞・目的語」は行為を念頭に置いた他動性の高い構文である。この構文が「My cell phone gets wrong.」のように様子や状態にまで広がっていく。また反対に、自動詞が「Look what time it is.」のように他動詞化することも多い。池上や金谷が英語を「する」言語だと説明するゆえんである。この構文がさらに強められると、目的語にさらに行為（主語・動詞）が織り込まれ、「Mother gets me to study.」のように対象に何かをさせる、対象をそのように変える、という使

役動詞化にいたる⁵⁵。

日本語と英語を比較すると、日本語は「は」の作用が際立ち、英語では「主語」の際立つことが理解できる。日本語のが格（主格）は、他の格助詞に比べれば多少優位などころはあるが、英語の主語のような強力な作用は持っていない。また、次のような文は、が格を主語と同一視するのが危険であることを教えてくれる。

ウナギが好きだ。

ウナギが食べたい。

「ウナギが」は直接目的語を示していると解するのが妥当であろう。しかし、これを非文法的と考えるのは本末転倒である。そのことは能格言語のところでも述べた。この発話者にとっては、ウナギが好きなものや食べたいものとして現れているのである。

反対に、主語に相当するものをが格以外で示す文も挙げておこう。

本社では今年も新卒学生を募集します。

私にはあの先生が怖い。

このような例を考えていくと、表層の構文や格関係と同時に、意味的な基

⁵⁵ 他動詞だけでなく、自動詞さえも使役化する。（池上 1981, p.277）

Mary sung the baby to sleep. (メアリが歌を歌い、赤ちゃんは眠った。)

John danced Mary weary. (ジョンがメア리를躍らせ、メアリはへとへとになった。)

準を考えた方がよいとわかる。そこで「動作主 actor, agent」という概念をたてる。これは意味的な概念であり、で格の「本社」、に格の「私」がそれぞれ「募集する」や「怖がる」の動作主である⁵⁶。英語では、主語が話題や動作主と原則的に一致する。これは主語の驚くべき強力さと言わなければならぬ（この主語中心主義を、エゴ ego セントリックをもじってエイゴ ego セントリックという。ぜひとも広まってほしい概念である）。

この主語の強力さと絡めるときに、國分の議論が精彩を帯びてくる。

動詞は後に人称を獲得し、それによって、動詞が示す行為や状態を主語に結びつける発想の基礎がそこに生まれる。…だがその後、動詞はより強い意味で行為を行為者に結びつけるようになる。…中動態が失われ、能動態が受動態と対立するようになったときに現れたのは、単に行為者を確定するだけではない、行為を行為者に帰属させる、そのような言語であったのだ、と。⁵⁷

この「行為者」を本論の「動作主」と重ね合わせて理解するならば、國分が指摘しているのは主語の卓越であることが理解されよう。主語が、行為の起点というだけでなく文の話題をも独占することによってこそ、「この行為は誰のものか？」という問いは喚起されるであろう。もちろん主語になるの

⁵⁶ 以上、（角田 1992）を参考に議論を組み立てた。「主語 subject」「主格 nominative case」「主題 topic」「動作主 agent」を区別するのは大切だと思

う。日本語ではどれにも「主」のつく訳語があるので混乱が深まるという指摘はもつともだ。

⁵⁷ （國分 2017, pp.175-6）

は人間だけではない。英語が猫も杓子も主語から発する行為で考えようとすることは、「What made her do so?」のような、受験英語で言うところの無生物主語の多発でおなじみである。これは、「主語が行為する」という枠組みで出来事を語ろうとした英語の苦肉の策なのであろう。日本語でこのような表現になじみがないのは、何が主語かを考えずに、述語に補語格を適宜補って出来事をそのまま語るのがふつうだからだ。

英語における主語の卓越はこれで十分明らかと思うが、議論の視野をもう一步広げて、能格言語についても考えておく。ただし、能格言語の説明はやや錯綜するので、議論を追うのが面倒であれば文法的な記述は読み飛ばしてもらって構わない。

以下、角田の能格言語の研究⁸⁸から本論に興味のある部分を取り上げる。先に説明した通り、能格言語の絶対格は、対格言語における自動詞の主格（主語）と他動詞の対格（目的語）の二つの役割を兼ねている。ということとは、英語流の受動態の作り方、「主語と目的語を入れ替える」という操作は対格言語には存在しない。そのかわり、他動詞の能格を絶対格に変え、元の絶対格は能格あるいは斜格（主格と対格以外の格の総称）に格下げするという逆受動構文が存在する。

第一に、能格言語の中で逆受動構文を持つのは一部である。第二に、この逆受動構文は「受身」の意味を表す構文ではない⁸⁹。それは、他動詞の能格を絶対格に「格上げ」という、主格を落として受動態をつくる対格言語とはおよそ反対のふるまいからも想像がつくだろう。能格はあくまで補足的

⁸⁸ (角田 1986)

⁸⁹ フロゴ語では、能動構文を逆受動構文にすると「進行・継続または習慣・傾向」を表す場合がある。(角田 2003)

であり、統語上の優位が絶対格にあるのである。それでは逆受動構文の機能は何だろうか。

英語や日本語のような対格言語は、複文において主語（主格）は省略できるが、目的語（対格）は省略できない。

Kira came here and killed L. Kira killed L and went somewhere.

キラがやって来て、Lを殺した。キラがLを殺して、どこかへ行った。

*L went there and Kira killed. Kira killed L and went to heaven.

*Lがそこへ行くと、キラが殺した。Lをキラが殺して、天国へ行った。

ポイントは、動作主は省略できるが、対象は省略できないということである。対象を省略すると「and」や読点の前後で動作主が切り替わったと誤解されるため、非文法的になるのだろう。そこで「Lが」や「Lを」を省略するためには、受動態にする必要がある。

L went there and was killed by Kira. L was killed by Kira and went to heaven.

Lが行くと、キラに殺された。Lがキラに殺されて、天国へ行った。

これが適切な文と感じられるのは、動作主が切り替わっていないことがはっきりわかるからである。ただし、確かに文法的だけれども、英語でも日本語でもこのような目的で受動態を用いることはほとんどない。

それでは能格言語においては、複文の絶対格と能格のどちらが省略されるのだろうか。これは、絶対格を省略するパターンと、能格を省略する（統語

においては対格型の) パターンがある。逆受動構文が活躍するのは、絶対格を省略する方である。以下に、オーストラリア原住民語の一つであるワロゴ Warongo 語の例を示す⁶⁰。[]は省略。

Pama yani warnngu+ngku, [pama] palka+lkku

男(絶対格) 行く、女(+能格) [男(絶対格)] 殴る(+目的形)

男が行って、女がその男を殴った。

Warnngu+ngku pama palka+n, [pama] yani+yal

女(能格) 男(絶対格) 殴る(+過去) [男(絶対格)] 行く(+目的形)

女が男を殴って、その男が行った。

動詞の目的形はある動作の次に起こった動作であることを示す(能格・絶対格・動詞なら+lkku、絶対格・動詞なら+yal)。読点の後で動作主が切り替わっているのがわかるだろう。英語や日本語と同様の発想で一文目の能格「女が」を省略したり、二文目を女が行ったという意味にしたりしようとするとは非文法的になる。

しかし、ワロゴ語でも動作主を切り替えずに「女が行って、(女が) 男を殴った」と言いたいときがけっこう(一〇回に一回くらい)ある。そこで逆受動構文を使う。

⁶⁰ ワロゴ語のネイティブは一人もいなくなってしまった。現在は言語復興運動が行われている。

warnngu yani, [warnngu] pama+wu palka+kali +yal

女(絶対格) 行く、[女(絶対格)] 男(+斜格) 殴る(+逆受動)(+目的)

女が行って、男を殴った。

逆受動構文の使い方がわかったと思う⁶¹。読んでほしいのはここからである。

対格言語で「主語・述語」型の英語は、複文で動作主を切り替えず、動作主を表し話題を示す「主語」を持つ。

対格言語で「話題・説明」型の日本語は、複文で動作主を切り替えず、動作主を表すが格と話題を示すは助詞を持つ。

能格言語のワロゴ語は、複文で対象を切り替えず(動作主を切り替え)、動作主を表す格が自動詞の絶対格・他動詞の能格・逆受動構文の絶対格の三つに分かれている。

この三つの言語に対して、談話の他動詞文の中で動作主と対象とがそれぞれだけ言及されているかを調べる。談話中にあることがどれだけ取り上げられているかは、そのことがらのくり返し言及される回数によって判

⁶¹ 逆受動構文は次のように従属節中でも使われる。逆受動構文を使わなければ節中の「女」を省略できない。

Pama+ngku warnngu mayka+n [warnngu] kamu+wu pitya+kali+yal

男(+能格) 女(絶対格) 言う(+過去) [女(絶対格)] 水(+斜格) 飲む(+逆受動)(+目的)

男が女に水を飲むように言った。

断する⁶²。くり返しが起きた回数が多く、また一度始まったくり返しの長いほど、談話中で重要であると推定される。英語では能動態の主語、日本語では主格（が格）が、それぞれ動作主を表し、目的語と対格（を格）とがそれぞれ対象を表すとする。ワログ語では、能格・逆受動構文の絶対格が動作主を表し、絶対格・逆受動文の斜格が対象を表すとする。もちろん省略はカウントする。その結果は以下のとおりである（連続するくり返しの起きた数／連続するくり返しの平均値）。

	動作主	対象
英語	46 / 1.41	15 / 1.00
日本語	21 / 1.48	35 / 1.37
ワログ語	192 / 2.31	192 / 1.90

絶対格を統語の中心とするワログ語でも、話題の中心は動作主であることがまず注目される（逆受動構文の効果であろう）。ワログ語に話題のマーカがあるのかどうかかわらないが、対格言語の日本語と能格言語のワログ語で動作主の言及のされ方に大きな違いはなさそうだ。しかし、英語の分布は明らかに異なっており、話題が異常なまでに動作主に集中していることが認められる。國分の指摘は正しかったのである。

英語を通して「主語・述語」型言語の内実が理解できたと思う。ここでもう一度、リーとトンプソンの論文に戻りたい。そこには、「話題・説明」型の言語では受動態は重要ではない、という興味深い指摘がみられる。

受動構文は主語卓越言語に共通する。一方で、話題卓越言語では、受動化はまったく起こらない（ラフ語、リス語）か、発話ではめったに用いら

⁶² Zubin-Givon 法（角田 1986, p.151）

れない周縁的な構文として現れる（北京語）か、特別な意味を持っている（日本語における「迷惑の」受身）。話題卓越言語において受動態が相対的に重要視されないことは、次のように説明できる…主語卓越言語では、主語の概念はたいへん基本的であり、動詞がその主語「動作主」として指定する以外の名詞が主語となるとき、その動詞には「いつもとは異なる」主語の選択をしたという印をつけなければならない。…話題卓越言語では、構文上でより重要な働きをするのは主語ではなくて話題である。どんな名詞句も、主語による指定を受けずに文の話題となることができる。⁶³

これは、英語と日本語を対比するとき非常に腑に落ちる説明である。日本語では迂言構文という主語の再指定の必要がなく、自動詞か他動詞かも関係ない（文中の指摘は自動詞の非人称受動文が存在せず、迷惑の受身になることを指しているのだらう）。ただし、能動文と対応する受動文という意味では日本語における受身は周縁的だが、「れる・られる」には受身以外にも自発・可能・尊敬の意味があり、使役の「する・させる」ともシンメトリックな構造をなしている。そこには、能動態と受動態という対立とはまったく異質の態の世界が広がっている。この認識に至るためにも、日本語が「話題・説明」型の構文をとること、主語は重要ではないということをしっかり踏まえないければならないのである。

非人称の世界

天気の良い日に戸外に出て涼しい風に当たり、喜びがこみあげてきたと

⁶³ (Hopper & Thompson 1976, p.467) []は引用者

しましょう。人称の存在しない世界では、この喜びは、誰の喜びでもありません。まず、この喜びは決して「私」の喜びではありません。人称の存在しない世界には「私」はいません。かと言って、この喜びが、誰か「他者」の喜びであるわけでもありません。人称の存在しない世界に「他者」はいません。人称の存在しない世界では、この場合、ただ、「喜びがこみあげてくる」と叙述できるような、ある事態が成立したこと以上でも以下でもないのです。

森岡正博「人称の存在しない世界」

ラテン語では動詞の活用で主語の人称が特定できるため、主語の人称代名詞を省略することが多い。

Cogito, ergo sum.

「*cogito*」は「考える」の一人称単数である⁶⁴。したがって、「*Cogito*」の一言で「*I think*」である。「*ergo*」は接続詞「ゆえに」でもちろん活用はない。「*sum*」は英語の「*am*」（一人称単数）にあたる⁶⁵。

こうした動詞の人称は、ラテン語の子孫であるイタリア語、スペイン語、フランス語でもかなり保存されている。イタリア語とスペイン語は主語を立てなくていいが、フランス語では主語が必要である。

⁶⁴ 二人称単数 *cogitas*、三人称単数 *cogitat*、一人称複数 *cogitamus*、二人称複数 *cogitatis*、三人称複数 *cogitant*

⁶⁵ 二人称単数 *es*、三人称単数 *est*、一人称複数 *sumus*、二人称複数 *estis*、三人称複数 *sunt*

Penso, dunque sono.

Pienso, luego soy.

Je pense, que je suis.

ちなみに同じゲルマン語派であるドイツ語と英語では、次のとおりである。

Ich denke, also bin ich.

I think, therefore I am.

親戚関係にあると考えられている朝鮮語と日本語では、次のとおりである。

나는 생각한다. 고로 나는 존재한다.

私は考える、ゆえに私は存在する。

「*나*」は「私」、「*는*」は「は」、「*한다*」は「だ・である」、「*고로*」は「ゆえに」、「*존재*」は「存在」。語の並びがびったり対応している。

ただし、日本語は漢文訓読の長い歴史があり、これはヨーロッパにおけるギリシア哲学やラテン文学の影響に比するものがある。というわけで、あえて漢文調に訳したのが「我思う、ゆえに我あり。」である。助詞の「は」が抜けているし、人間に対して「ある」は使わないのが普通である。こなれた日本語としては「私は考える、だから、いる。」くらいが良いと思う。ちなみに中国語では、

我思故我在

漢字がすべて対応するので、たいへんわかりやすい。ちなみのちなみに、英語とフランス語でも語の並びがぴったり対応する。一〇六六年のノルマンコンクエスト以来一三〇〇年頃まで上流階級の第一言語がフランス語だったことの影響を偲ばせる⁸⁶。フランス語も、主語卓越言語の中でかなり主語の強い部類に入るようだが、その理由を調べ切れていない（よい研究があったら教えてください）。

閑話休題。これから非人称構文の説明に入る。ラテン語やイタリア語やスペイン語では、この構文は動詞の三人称単数（まれに三人称複数）で主語を立てない形である。「Cogito」の場合は一人称主格「ego」を指しているのが明らかだが、「Pluit」（雨が降る）は何か動作主が想定されているわけではない。イタリア語は「Piove」、スペイン語は「Llueve」でやはり主語を置かない。フランス語は「Il pleut」で、「il」は英語の「he」に対応する⁸⁷。この三人称単数をあえて意味づけするなら、一人称や二人称に入らない、天候であつたり場所であつたり時であつたり、〈人間〉以外のなものか全般

⁸⁶ 日本語の散文の半分くらいの言葉が中国由来であるように、英語の散文の半分くらいの言葉はフランス由来である。日本語を通して中国語を透かし見ている程度には、私たちは英語を通してフランス語を透かし見ている。⁸⁷ もちろん「it」は指示代名詞で、人称代名詞ではない。

Il est impossible de terminer ce travail. (It is impossible to finish the work.) のように英語の形式主語とびったり対応する構文もある。

「il me semble...」が英語の「methinks (it seems to me...…と思われる)」に対応するのも押さえておいていいだろう。

ということであろう⁸⁸。

この「非人称のil」を使って以下のような文をつくれる。

Il faut aller à l'école. (学校に行く必要がある。)

Il reste encore de la neige. (まだ雪が残っている。)

規則だつたり状態だつたり、誰が何をするという発想におさまらない（できごと）を表現する構文である（「il faut」は「…しなければいけない」「…が必要だ」といった意味の定型表現）。また、「Il me reste encore à faire. (まだ私には仕事が残っている。)」のように動作主を示すこともできる。英語の「That reminds me a story. (話を一つ思いつく。)」のような表現である。こうした「非人称のil」にはさらに特殊な用法がある。

Un grand malheur lui est arrivé. (人称構文)

Il lui est arrivé un grand malheur. (非人称構文) ⁸⁹

文の意味はどちらも「彼にとつても悪いことが起つた。A great misfortune

⁸⁸ 興味深い構文として「Il y a」を挙げておく。「y」は物や場所を示す中性代名詞。「a」は「avoir (英語の have)」の三人称単数だが、「彼がそれを持つ」ではなく「…がある(英語の There is …)」という構文である。「il est」と言いかえられる。バンヴェニストが「être と avoir の言語的機能」に関心を寄せるゆえんである。いかにもフランス語話者らしい問題意識だ。日本語話者なら「ある」と「なる」の由来が気になるようなものであろう。

⁸⁹ (東郷 1994) 下線は私が補った。

happened to him.」である⁷⁰。この言い換えにはどのような文法的機能があるのか。これを論じている東郷は、第一に「脱テーマ化」つまり文頭という話題の位置から主語を格下げすることを挙げている。なぜそのようなことをするのか。この言い換えができるのは、「il reste (残っている)」⁷¹「il manque (欠けている)」⁷²「il arrive (起る)」⁷³「il vient (来る)」⁷⁴「il existe (存在する)」⁷⁵「il est (il y a 同義)」⁷⁶「There is...」といった、存在・出現・消滅の自動詞表現に集中していることがヒントになる。また、「il」によって後方に置かれた名詞を統計的に調べてみると、「物を表わす非可算名詞と抽象名詞が多く、人を表わす可算名詞は少ない」。つまり、動作主になりにくいものが選ばれている。これはまさに「自然の勢い」、おのずから出て来る〈できごと〉を表すものであろう。フランス語にもこのような表現がしつかり残っていたのである。これは人称化する前の英語の非人称構文を思わせるし、「it happens to me that...」「it appears to me that...」などは同様の発想に立っていると言える。

さらに東郷は、こうした表現の他動性の低さを指摘している。すなわち、選ばれる動詞は先の自動詞表現の他、再帰（これからくわしく論じる）や受動態という、他動性の低い動詞に限定されている。先に検討したように、他動性が高いということは、動作主と働きかける対象がそろっており動作主の行為がその対象を変えてしまうということであった。そうではなく、動作主や働きかける対象をぼかしたり明示しなかったりする表現と「非人称の il」は共起している。つまり、「Kira a tué L. (Kira has killed L. キラはLを殺

⁷⁰ arriver は英語の arrive に対応するが、非人称構文では、到来する・予想外のことが起こるといったニュアンスになる。

した。）」ではなく「Il se provoque la mort de L. (It causes L's death. Lの死となる。)」というわけである。東郷はこんな例を引いている。

— Qu'arrivera-il de tout ceci? dit le bonhomme épouvanté.

— Il vous arrivera mademoiselle Flore Brazier dans quatre heures d'ici...

「これからいったい何が起こるんだ？」男はおののきながら言った。

「フロール・ブラジエ嬢がやって来るんですよ、四時までにはここに…」

バルザックの『人間喜劇』の一篇「ラ・ラブイユーズ」の一節である。壮絶な生涯を送るヒロイン、フロール・ブラジエ（通称ラブイユーズ）が、「非人称の il」を使うことで、東郷の言を借りれば「あたかも台風のように襲って来る災厄」として表現されている。〈人間〉を〈できごと〉として描くことによる文学的效果を狙ったのだ。以上を要するに、非人称構文には主語の「脱テーマ化」に加えて他動性の低下、いわば文の「脱行為化」の働きがあると考えられる。

受動態の世界

印欧語の人間中心的な能動態の動詞は、行為する〈動作主〉…に対して際立った役割を与え…、能動態の主語が…思考の最も目立った位置に現れる。…しかしまた、出来事を〈動作主〉と切り離して捕えることも可能である。…行為中心の見方とは対照的に、世界は出来事として捉えられる。…こういう観点から出来事を精神的に整理し理解することを通して、『受

動態』の世界が形成されるのである。

レオ・ヴァイスゲルバー『受動態』の世界

受動態の働きについて、大まかに二つの説が提案されてきた。第一のものは、「主語・動詞・目的語」を「目的語・動詞」に変えることで、目的語を主語へと昇格・テーマ化するというものである。他動性が動作主から対象へと向かい、主語が動作主と、目的語が対象と対応するならば、目的語の昇格はどうぜん被動性を示すものとなる。

第二のものは、主語の降格と動作主の消去に重点をおくものである。被動性を表すことは副次的であって、主語を脱テーマ化するとともに文の他動性を低めることが受動態の本質的な働きである。例えば、行政文書や科学論文で受動態が多用されるのは、動作主を明示しないことで「曲げることでできない規則・法則」や「客観性」を表現するためであって、目的語をテーマにするためではない、と説明される⁷¹。

私は第二の見方を取る。なぜなら、この観点に立つことで、非人称構文や再帰構文、「自発・可能・尊敬」の表現、そしてもちろん中動態という、非常に広範な（しかし周縁的な）言語現象の中に受動態を位置づけることができるからである。

第二の見解の例証、すなわち、目的格を主語へと昇格しない受動文をつく

⁷¹ (東郷 1995)

トルコ語では、非人称受動が張り紙などによく用いられ、許可や禁止を表す。
(青山 2015)

Burada sigara içilmez. (ここは禁煙。)

Burada 'fırda here' sigara içmez 「タバコを吸う」。

る言語が存在する。それはアイヌ語である。この驚くべき知見から、ヨーロッパの言語を念頭に考えられてきた受動態の概念を覆したのが柴谷の研究である⁷²。

アイヌ語は主格や目的格を持たず、動詞に主語や目的語の人称が表示される。主格の二人称単数には「e-」目的格の一人称単数には「en-」がつくので、「あなたが私を招待する」は「e-en-tak」(tak 招待する)という。人称代名詞は基本的にとらない⁷³。アイヌ語の一人称は、一人称単数「ku-」、「除外の一人称複数(他動詞)ci-」[包括的一人称複数(他動詞)'a/an-]がある。相手を含まない我々(除外的)と、相手を含む我々(包括的)とを区別するのである。また、主格は基本的に一人称複数「我々」で表すようだ(私が、ではなく、私たちが、で考える)。このうち、包括的一人称複数が受動態に転用される。なお、三人称を示す格はない(便宜上、主格や目的格に三人称を取ったことを ϕ で表記する)。

nipsa 'utar ϕ -en-tak

旦那さんたちが私を招待する。

nipsa 'utar 'or wa 'a-en-tak

旦那さんたちから私は招待される。

⁷² (Shibatani 1985)

ただし、アイヌ語の紹介は(佐藤 1995)によった。

⁷³ ここで人称代名詞が必要だと感じるのは英語的な感覚である。ラテン語ならそこまで不自然ではない。

「or」は場所(英語 at)を、「wa」は方向(英語 from)を示す。主格(φ)であった「nipsa 'utar」が降格され、包括的一人称複数の主格「a」が付け足される。ここまでは、が格をに格に降格して「れる・られる」を付け足す日本語の類推で考えられるが、問題は「en」である。この場所は、日本語ならを格をが格に、英語なら主語の位置に昇格させるはずのところだが、アイヌ語はそれが起こらないのだ。つまり、フランス語の「非人称の₂」に似て、ただ主格の降格だけが起こる(したがって、アイヌ語の受動態に主語にあたるものはない)のである。さらに、「a」は以下のように他動詞に自発の意味を与えることができる。

chip 'a-φ-nukar

船を私たちが見る

この直訳は正しくない。これは「船が見える A ship is visible」と訳さなければならぬのである。動作主は船を見ている私であり、私たちではないことも重要である。この表現には「見ゆ」に通じるものがあると思う²⁴。アイヌ語の先駆的な研究者である金田一(京介)は「a」を「不定称」と呼び、後の研究者も「不定人称」と呼んでいる。一人称包括複数の主格にこのような役割が与えられることは「非人称の₂」を彷彿とさせる。

このような「不定人称」が受動態のマーカーとなる例を柴谷はいくつか紹

²⁴ 「船影見ゆ」「敵艦見ゆ」などの表現が今でも軍事小説で使われている『敵空母見ゆ』——空母瑞鶴戦史「南方攻略篇」(光人社 ZF 文庫)。これは、視界の中心対象がおのずと現れるという語感を今に伝えるものだ。

介している²⁵。

チュウキク Trukic 語 (シクロネシア)

Waan re-lila-φ

Waan they-kill-him (ワーンは殺される)

インドネシア語

Adik-ku bias di-ajak

brother-my can pass-ask (私の兄弟は訪ねることができる)

「di-」受身の接頭辞²⁶だが、三人称の「dia」に関係していたと考えられている。いずれにせよ、こうした「不定人称」の背景には、人称のない(できごと)の世界に動作主を溶かしこむという受動態の起源を読み込むことができそうではないか。

受動態の原型(プロトタイプ)を考えると、最も重要なのは動作主を消し込むことである。この観点からは、「Sic itur ad astra」のような動作主の現れない非人称受動文こそ典型的な「受動態」と言える。そこから、他動詞文において目的語を主語に再指定したり、副詞句や斜格で動作主を示したり、

²⁵ 柴谷の論文では、アイヌ語の「a」が尊敬の用法も持つ理由を、フランス語の vous のように複数形が尊敬に転用されることが広く認められるところから推定している。

²⁶ インドネシア語にはこれ以外にも接頭辞「ter-」で受身をつくり、受動の意味を基礎として、完了、非意図的行為、自発、可能などの意味が加わる。(正保 1986)

被害、可能、尊敬のような用法を派生したりというように徐々に動作主が立ちあらわれ、動作主が何かをするという能動態の原型に近づいていくグラデーションを描くことができよう。また、動作主を示さなければ動作主・対象の片方が欠けるのだから、文の他動性は低くなる。だから、状態や法則や規範など、人間の行為では変えられないものを表すときに好まれるようになる。以上は理屈の上の話だが、この章のまとめに、日本語の「れる・られる」が持つ受身・尊敬・自発・可能の用法を、動作主の脱テーマ化と他動性を落とすことによる脱行為化という観点から統一的に説明してみよう。

太郎が殴られる。

これは、太郎の被動性を強調する文ではなく、太郎を殴った動作主を隠べいする表現ととらえなければならぬ。動作主がだれだかよくわからず、あるいは動作主を言いたくないときに、太郎が殴られるという出来事だけを取り上げる文なのである。このように考えることで、「太郎が殴る。」という動作主を明示した文と、「太郎が殴られる。」という動作主を明示しない文とを対比させることができる。を格やに格は、必要に応じて補えばよい。それは英語が必要に応じて「by」を補うのと同じである。

陛下が巡幸される。

これは、陛下よりもさらに偉い誰かによって陛下が巡幸の対象となったという表現ではなく、陛下を直接に動作主として名指すことを避けているのである。そもそも「陛下」という文字からして、宮殿の階段のもとにおられる

方といったつくりになっている。尊敬表現は一般に、尊敬対象を直接名指さないことによって敬意を表現する³⁾。「れる・られる」が尊敬の意味を持つことは、動作主を脱テーマ化し直接的な言及を避けようとする動機によって説明ができる⁴⁾。

故郷が偲ばれる。

これは、「偲ぶ」という行為の脱行為化である。感情は自動詞でおのずからおこってくるものと表現するのが普通であり、他動詞を使いたいときには動作主を消して自動詞化した表現にする⁵⁾。「ふるさとなつかしいなあ」という気持ちはどこからともなく湧いてくるというイメージである。あるいは、故郷が「偲ばれる」という状態で現れていると考えてもいいだろう。「と思われる」「と感じられる」「と考えられる」なども動作主を背景化した自発的な表現である。そこに客観性のニュアンスが加わっていることも注目されるだろう。

³⁾ 「陛下が」を「陛下におかれましては」とするとより尊敬度が高まる。が格をに格に落とし、おくをおかれるにし、「ます」で丁寧にしてから「は」で話題化するという手の込みようである。

⁴⁾ アニミズム的な世界観では、行為を非人称的な（できごと）の表現に近づけることで、尊敬対象を自然物のようにみなそうとする心理があるのかもしれない。ただし、受身が自発や可能と結びつくことは他言語にも広く認められるが、尊敬と結びつく例はあまり多くないようだ。

⁵⁾ 英語でも感情が受身で表現されるし、そうでない場合は「wonder」のように自動詞が基本である。フランス語でも「je suis intéressé」のように受動態や、「je me demande」のように再帰動詞がつかわれる。

納豆が食べられる。

これを「Natto is eaten by someone.」と訳す人はいないだろう⁸⁰。先に分析した通り、これは納豆の「eatable」という性質を表す文である。「可能」は「自発」と同様に考えることができるだろう。能力というのは、行為と違って、人やものごとのなかに持続的に備わっている潜勢力である。だから、「食べる」という行為を脱行為化して「食べられる」という状態の表現にする。そうすると、納豆にはおのずから「eatable」という潜勢力が現れるのである。そのように納豆が現前する人が、納豆を食べることのできる人である。そのような人は「私には、納豆が食べられる。」と言うはずである。「この店ではユッケが食べられる。」なども参考になる。

再帰と自発の世界

もとよりそれは、気儘な自由放埒ではないが、そうかといって、明確に意識化された自己確立の自由とも断然異なっている。むしろ、それは、「ふ」と「我知らず」湧き起こってくる自己了解の運動性格なのである。…我々があえて〈自発性の回路〉と呼ぶものは、このような自由を「許容」する世界内存在の全体的生起に他ならない。

森一郎「自発性の回路——

ハイデガー『存在と時間』における世界概念の再検討」

⁸⁰「太郎に納豆が食べられる。」は「Taro can eat natto.」と訳す「Natto is eaten by Taro.」とも取れる。このへんは機械翻訳も悩みどころだろう。

深遠なるウィーン人ウイトゲンシュタインはこう言った。

「私が手をあげる」とき、私の手があがる。ここに一つの問題が現れる。私が手をあげる ich meinen Arm hebeということから、私の手があがる mein Arm sich hebtということを差し引いたとき、そこに残るものはいったい何か？⁸¹

「sich」は「Er denkt an sich（彼は自分のことを考える）」のように、主語と同じものが与格や対格（目的語）にきていることを示す。英語では「help yourself⁸²（ご自由になろうぞ）」のような表現がある。つまり先の問いは、形の上では他動詞から他動詞を差し引いているわけで、後にはなにも残らない！もちろんこんな解説をしてみた日には、ジョークの通じないウイトゲンシュタインがぶち切れて手をあげるのは確実である。ラッセルに「私の手をあげる I raise my hand」から「私の手があがる my hand rises」を差し引くとたしかに「I」が残っているね、ととりなしてもらいたところである。言葉遊びはさておき、ウイトゲンシュタインの「何か残るものがある」という感覚は正しい。ウイトゲンシュタインの発想は、まず他動詞を考え、それを自動詞の表現に直すことで、そこから差し引かれた動作主を考えるもの

⁸¹ Philosophische Untersuchungen § 621

http://www.geocities.jp/mickindex/wittgenstein/witt_pu_gm.htm#localin nk-c620

⁸² 目的語の位置にあることからわかるように、me myself, yourself, herself, himself, itselfと言った。今も hisself や itself とは言わない（言う地域もあるらしい）。self-control のように self だけで「自分」を表す名詞なので所有の感覚が生まれたのだらう。

だ。これはなかなか面白い方法で、能動態から受動態を引くと何が残るのか？と考えるのも一興である。ここで確認したかったのは、再帰表現が他動詞を自動詞へと変える方法だということである。

I found my key. (鍵を見つけた。)

I found myself on the bed. (気が付くとベッドの上だった。)

ここでは再帰によって目的語が消え、動作主の行為が動作主自身へと帰ってきている。これが「再帰」という言葉の基本的な発想である。しかしウィトゲンシュタインのように、「手を上げた」という他動詞文の対象を主語にもつてくると、「手がおのずと上がった」という表現になる。ふたたび「アイスクリームがよく売れる」を考えてみよう。

Ice cream sells itself well. (英語)

Das Eis verkauft sich gut. (ドイツ語)

La crème glacée se vend bien. (フランス語)

ウィトゲンシュタインがこれに思い当たったかどうかは知らないが、客の呼び込みに精を出していた売り手がふと気が付くと、いつのまにかどんどん買い手が現れてアイスがおのずと売れていくという状況の反転がここにはある。先に、受動態は目的語のテーマ化であるという説を否定したが、この説はむしろこうした再帰表現によく当てはまるのではないか。これと関連して、自動詞を非対格動詞と非能格自動詞に区別する説も紹介しよう。

非対格自動詞…主語を消して作った自動詞「sell」

~~Asheer~~ sells ice cream. (主語・動詞・目的語)

非能格自動詞…目的語を消して作った自動詞「eat」

I eat ~~icecream~~. (主語・動詞・目的語)

つまり、非対格自動詞は「意味上の目的語・動詞」の形をしており、非能格自動詞は「意味上の主語・動詞」の形をしている。この名前は、非対格自動詞は対格言語において対格をとることができず（なぜなら「意味上の目的語・動詞・目的語」になるから）、非能格自動詞は能格言語において能格をとることができない（なぜなら「主語（能格）・意味上の主語・動詞」になるから）ことに由来するという（Wikipedia「自動詞」）。非対格自動詞の典型としては「なる」、非能格自動詞の典型としては「する」を考えると理解しやすいだろう。ただし、私はこれは大変にエイゴセントリックな発想と思う⁸³。第一に、この二分法が提案される背景には、自動詞と他動詞が同じ形をしているという英語特有の事情がありそうだ。第二に、「非対格自動詞」には「壊れる break」「広がる spread」「開ける open」のように対応する他動詞の形が想定されるものと、「死ぬ die」「茂る grow」「腐る perish」のよう

⁸³ この分類は Perlmutter の、非能格自動詞は受動文を作れるが、非対格自動詞は主語が意味上の目的語だから受動文を作れないという「非対格仮説」によるようだが（受動文の有無による動詞の分類という点で三上の能動詞・所動詞と通じる）、私はこのような発想に賛成しない。「なる」自動詞は、非人称構文と同じ「できごと」の表現だから、あえて受動態で動作主を消す必要がないのである。

うに想定されないものがあり、この区別はつけた方がいいと思う。第三に用語の問題である。他動詞の目的語と自動詞の主語との転換は「絶対格性」と呼ぶべきであろうし、「非能格自動詞」という屋上屋を重ねる用語は議論の混乱のもとである⁸⁵。とはいえ、「非対格自動詞」は再帰構文の本質をついた概念であり、ヨーロッパ言語の理解にとっても役立つように感じる。目的語の主語化をここに「非対格性」と呼ぶならば、再帰と自発は非対格性を通じて結びつくのである。

再帰構文の故郷はラテン語にある⁸⁶。それは再帰代名詞(三人称対格「se」⁸⁷、与格「sibi」)である。ラテン語の方言から発展したイタリア語、スペイン語、フランス語、ルーマニア語といったロマンス諸語で、かつての「se」は再帰・自発・受動にまたがる幅広い働きをしている。しかしラテン語では、再帰を示す代名詞と受動・中動態を示す動詞の人称語尾⁸⁸とがそれぞれの機能を受け持っていた。この分担のために、再帰代名詞はただ再帰の意味だけを果たしていた。

⁸⁵ 古語の「去ぬ」には非能格自動詞の「去る」と非対格自動詞の「死ぬ」「腐る」の意味があるとか、いろいろ問題が起きそう。私は、動作主に人間を想定したうえで、動作が目的語を必要とする(他動性が高い)か、目的語を必要としない(他動性が低い)かを考え、後者を非能格自動詞と呼ぶのだと思っている。

⁸⁶ 英語やドイツ語が由来するゲルマン祖語も再帰代名詞を持っていたと考えられる(古ノルド語の *sik*)。サンスクリット語も再帰代名詞を持っているらしい。

⁸⁷ 一人称単数-*or*、二人称単数-*ris(-re)*、三人称単数-*tur*、一人称複数-*mur*、二人称複数-*mini*、三人称複数-*ntur*

Se quisque fugit. (誰もが自分自身から逃げる。)

Quisque は男性・単数・主格「一人一人」、*fugit* は能動態・現在・三人称単数「避ける」。こうした使い方は理解しやすいものだろう。すなわち再帰とは、動作主と対象が分離している他動性の高い文で、その対格や与格に動作主自身をとることである。典型的には、「*occidere se* (彼は)自殺する」を想定すればよい。英語なら「*kill oneself*」、日本語も「自分を殺す」と分解できる(能格的だ⁸⁹)。

しかし、人称語尾は衰退し、「se」は再帰から中動そして受動の領域まで広がって用いられるようになった。まず広まったのは身体動作 (*body action middle*) だと考えられている。以下、フランス語の例。

Paul lave la main. (ポールが手を洗う。)

Paul se lave. (ポールが体を洗う。(自分自身を洗う))

Paul lève la main. (ポールが手をあげる。)

Paul se lève. (ポールが起床する。(自分自身を起こす))

他動性が低くなっているのがわかるだろう。フランス語学習者が最初に習う「*Je m'appelle Paul*。ポールといいます。」は「*I call me Paul*」の形だが、これも他動性が低くなり、動作が動作主のなかで完結している。ここであたたびバンヴェニストを思い出していただきたい。これはまさに、「他動態(外

⁸⁹ 故意に自分の健康を害する(自傷 *self-harm*)の過程も、再帰から中動態(自発)へと移っていくかもしれない。とすれば、自傷とは「死に至る病」なのか。

態)」と「自動態(内態)」ではないだろうか。とすれば、中動態しかとらない動詞、つまり動作者が行為の中で完結している動詞とは、そもそも他動詞的用法を持たない典型的な自動詞であろう。その一つは「死ぬ」であり、バンヴェニストはサンスクリット語の「*mriyate, marate*」とラテン語の「*morior*」を挙げている。後者は「*memento mori* 死を忘れるな」でおなじみである。また、バンヴェニストは「寝ている」「坐っている」を挙げているが、このように身体全体を使つた姿勢の動作も非常に他動性の低い表現である⁸⁶。

ともかく、フランス語はこのようにして再帰構文から他動詞・自動詞の対立を作り出し、「*se/mette* + 他動詞」を代名動詞として文法化した。同様の過程はイタリア語やスペイン語などでも進化した。

それでは次に再帰構文と受動態の関係について考えよう。見てきたように、フランス語は他動詞と自動詞の転換を、再帰構文を發展させた代名動詞によって行うことが非常に多い。これとは反対に、英語では再帰構文は衰退の一端をたどっている。そして、再帰構文を駆逐しているのが受動態なのである。

再帰、受動、自動詞の順に競合する形を並べれば、以下のとおりである。

⁸⁶

太字が最も使用されてきた・使用されている形である。完全に熟語化して

⁸⁸ フランス語では「*se coucher* 眠りにつく」「*coucher* 寝る」の対比が興味深い。「*se coucher*」は眠る動作を、「*coucher*」は寝ていることを表すから、こちらは再帰代名詞によって出来事が行為に読み替えられている。バンヴェニストは中動態から他動性が生じたともコメントしているが、再帰は元が他動詞だったことを含意するから、典型的な自動詞に再帰用法を加えることで動作を表すこともありうるのだらう。

⁸⁹ (秋元 2014, p.134)

content oneself with	be contented toV	*be content with NP
avail oneself of	be availed of~	(it avails NP)
devote oneself to	be devoted to	devote NP to
apply oneself to	be applied to NP	apply to NP/NP to
attach oneself to	be attached to NP	attach to NP/NP to
address oneself to	be addressed(to)NP	Address to NP/NP to
confine oneself to	be confined to NP	confine NP to
concern oneself with/about/in	be concerned with/about/in	concern NP

toV : to 不定詞 NP : 名詞句 *それ以外の形

いる「*avail oneself to*」以外は受動態や自動詞が優勢である。これらの表現は意味が完全に一致するわけではない。「主語・動詞・目的語」という他動詞のプロトタイプを、再帰構文は「主語・動詞・主語」の形にするという点でやや行為よりである。対して、受動態は「受・動詞・目的語」を組み替えて主語を再指定する点でより脱行為化しやすい。あるいは、再帰文は行為のブーメランを投げる方に、受動文は行為のブーメランが戻ってくる方に焦点があると言えるかもしれない。しかし再帰構文、受動態はともに他動性が低い点で自動詞と共通している。熟語化の過程で「*oneself*」が落ちたり被動性のニュアンスが失われたりすると、表現としては自動詞と大差なくなってしまう。再帰、受動、自動詞のニュアンスをそれぞれ取り出して熟語化するのは難しいのだ。

フランス語の代名動詞には、自動詞との微妙な差異が今も息づいている。同じ「黒ずむ」の「*se noircir*」と「*noircir*」でも、前者はストーブの近く

にかけていて絵が黒ずんだという外からの原因のとき、後者は絵具の具合で絵が黒ずんできたという内からの原因のときに用いられるという違いがあるらしい。井口は、他動詞から派生した再帰形自動詞に非対格性があることを認めている⁹⁰。つまり、自動詞表現ではあるけれどもどこかに動作主があることをにおわせているのだ。

Le vin blanc se boit frais. (白ワインは冷やして飲むものだ。)

もちろん誰かが白ワインを飲む。しかしこの構文は、*être* (be 動詞) を使った迂言構文の被動性を示す受動態とも一線を画している。ここに「*per Paul* ポールによって」という副詞を加えることはできない。なぜなら、たいていの人がワインはこうして飲む、という非人称的な含意が重要だからだ。これは「*This book sells well.*」に「*by Paul*」を加えられないのと同じである。ここでバンヴェニストが中動態しかとらない動詞に「生まれる」も挙げていたことを思い出したい。ラテン語では「*nascor*」英語では「*be born*」フランス語では「*être né*」ドイツ語では「*geboren werden*」そして日本語でも「生まれる」で、どれも受動態である。しかしいずれも「*by my mother*」に当たる副詞句を付すことはできない。そこには動作主を句わせながらも、あくまでおのずと、しかし意図せずこの世に生を受けたというニュアンスが込められている。

私たちはこうして、自動詞と受動態とが微妙に重なり合った再帰構文の世界を見てきた。このような考察を行った最初の言語学者として、私たちは細

江の名前を記憶しておいて良いだろう。細江は「反照(再帰)、受動、自動(自動詞)」の法則として、印欧語の中相(中動態)を次のように説明している。サンスクリット語の「*namati* 曲げる」について、

Namati (能動態 *he bends*)

Namate (中動態 *he bends himself*) (自動詞 *he bows*) (受動態 *he is bend*)

という英訳を掲げ、ロマンス諸語においては「*self*」にあたる「*se*」「*si*」を添えた反照動詞が自動詞的な意味を持つことをあわせて指摘している。さらにアイヌ語の「*a*」にまで言及しているところには恐れ入ってしまう。そして細江は、日本語における中動態の標識として助動詞「ゆ」を提案する。

「ゆ・らゆ」は平安期に「る・らる」にとつてかわったが、いずれも他動詞に下接して自動詞をつくるとして、「見・見ゆ」「絶つ・絶ゆ」「溺る・溺れる」「埋もる・埋もれる」といった自他の転換をたくさん挙げている。これも興味深く、真剣な検討に値する。特に、四段活用の下二段派生を指摘していることは重要である⁹¹。

予は我が国語の動詞に於ては極めて古き上代に於て「ゆ」を語尾とする「中相」があつて「能相」と併立関係にあったたつた事…その性状も亦

⁹⁰ 細江はこれを1917(大正六)年に着想したとわざわざ断っており、この発見の先取権争いがあったことを伺わせる。というのは、湯沢幸吉郎が『室町時代の言語研究』で1929(昭和四)年にこのことを指摘し、そこに可能・受身・尊敬の用法があるとしているからである。細江の論文は1928(昭和三)年であった。

Atmane-Pada[中動態]と似て或動作又は状態がその主語たるものの内部に発動存在するか、又はその動作の影響がその主語たるものに反照するか、若しくはその主語たるものの状態がそのものの内部にありて移動することかを表はしたものであると信ずる。而して此「ゆ」は…一方「自動詞」の発生となり、又一方に於ては後世の「所相」[受動態]の基礎を成した⁹²。

そして、「原始中相」の機能を自動詞・自然の勢い・受動態に分け、自然の勢い（自発）から可能と尊敬が生じたのだらうと整理している。「る・らる」に受動態以外の用法がいろいろあるのは、その由来を「原始中相」に尋ねるなら当然だというわけである。

また、細江は日本語の間接受身を指摘し、それが英語で「I had (got) my watch stolen.」に当たり、さらにそこには「I had my hair cut.」の使役が対をなすとして、受動態を十把一絡げに「be + 過去分詞」としてはいけないう。チョムスキーには宜しく活眼を開いて日本語の「る・らる」を正視し給わる手筈である（とは言っていない）。

さて、問題はここからである。細江は先に述べた「反照、受動、自動」の法則と並行して「反照、使役、他動」の法則があり、また受動と使役は対になって発達したとして、それをすべて「中相」に由来すると考える。『イリアス』は中動態の、『マハーバータ』は Atmane-Pada の、『万葉集』は「ゆ」の所産である。結構な話だが、しかし四段動詞の下二段派生は室町期で、細江は少々時代感覚を見失っている。そこは⁹³愛嬌としても、「ゆ・らゆ」のどこに反照（再帰）的な要素があるのかは疑問とせざるをえない。もちろん

⁹² (細江 1928, pp.108-9) []は引用者

「見ゆ」はフランス語の「se voir」ラテン語の「videtur」だとは言える。しかし再帰を示す形態的な特徴はないと思う⁹³。とはいえ、細江が再帰に注目した理由は、近代ヨーロッパの言語において再帰表現の持つ、自他の対応・自発・受身・可能・非人称といった多様な文法機能を認めていたからではないかと想像される。このことは本章で確認した通りである。

時代は下るが、中動態にまつわるもう一つの視野の広い研究を私たちは日本語で読むことができる。柴谷はその論文の中で次のように問題を提起している⁹⁴。

- ⑥ 能動・中相の対立の方が、通時的にも共時的にも能動・受動の対立に優先するが、これはなぜか。
- ⑦ 再帰・中相から受身への発達が広く観察されるが、この史的展開にはどのような力が働いているのか。

柴谷はまず、能動・受動という態の変換は文の指示的意味を変えない、という一般的な説明を退け、それは行為を対象とした「主語の行為が他に向けられているか」「その結果が主語に帰属するのか」という意味的対立であるとする。極端な場合、文法関係を変えずに意味的対立を生じる態の変換が考えられ、現に古典ギリシア語では

⁹³ 「細江の法則に」説得力がないのは、そもそもどうしてこの順序なのか、という論理が十分明らかに示されていないからである。僅かに、現代の印欧諸語の受身、自動詞構文が両方とも時として再帰文で置き換えられる、という指摘があるばかりである。(金谷 1998, p.64)

⁹⁴ (柴谷 1987)

louo khitona (Active) 'I am washing a shirt.'

louomai khitona (Middle) 'I am washing a shirt for myself.'

という対立があった。動詞はいずれも他動詞であり、いずれも目的語をとっている。また、サンスクリットでは *rasmai padam*(他へのことば) *atmane padam*(自分へのことば)と呼ばれて区別されていた。これは本居春庭の「他を／に然する」「おのづから然せらるる」という動詞の分類を思い起こさせる。このように考えることで、態の体系に使役・他動詞・自動詞・受身を含めることができる。いずれも行為を主語と対象という点から特徴づけるからである。さらに、主語が卓越している言語ほど能動・受動の対立が強いという類型論の知見も取り入れることができる。また、他動詞に能動態と中動態の対立があったように、自動詞にも同様の対立が予測され、現に自動詞の非人称受身が英語以外の多くの言語に見出される(なお古英語には非人称受身があった)。日本語は自動詞の人称受身がある点で特異である。自動詞でも受身が好まれるのは行為を表す動詞に集中し、状態を表す動詞は受身を作らない。また、人称受身と非人称受身に共通するのは「動作主が主語として現れない」ことであり、対して能動文は「動作主が主語として現れる」。以上から、柴谷は態の意味的対立を以下のように要約する。

能動…行為が主語の意思のもとに発生する。

中相…行為が主語の意思のもとに発生し、その展開が主語の領域に納まる。
受動…行為が主語の意思によらず、他の独立した要素によってもたらされる。

そして、中相から受動への発達は、行為が主語の意思のもとに発したか(能動)、そうでないか(自発)という区別が、さらにその行為の発生が主語の意思によらず他の要因による(受動)というように変化したものと考ええる。

さらに柴谷は、中動態がいかに形成されそれが受動へと発達するのかを考えるのだが、細江との並行関係が興味深い。柴谷も「現代語の多くでは、中相範疇の出発点を再帰構文としている」ことから、まず再帰の発達があったとみる。どのような言語でも、そして再帰構文を再帰代名詞ではなく動詞から発達させた言語でも、再帰構文は中相範疇を形成する傾向にある。再帰からおそらく「非対格性」によって、行為が主語のもとに発しないで自然と起こる(細江の「自然の勢い」という自発の意味が生まれる)。

柴谷はさらに、なぜ再帰から自発そして受身へという大まかな発達順序が想定できるのかを考えている。それは、意味的対比を最大にしようとする「対比最大化の原理」であって、その両端に位置するのが、主語から対象へ行為が及ぶ他動詞能動態と、対象を主語に再指定してそこに外から行為が及ぼされる受動態であると考ええる。言語は能動態から出発する。そして受動態を指して、再帰から自発へと中動態の意味を展開させていく、とする。

以上、細江と柴谷との手になる中動態の発達史を概観した。柴谷の論は細江とは異なり、「対比最大化の原理」をもとに中動態が発達し受動態に至るまでを説明をしている点でより優れている。と同時に、細江と柴谷の説明は重要な点で共通している。それは、能動態の他動詞「主語・動詞・目的語」が言語表現の基本だということである。なぜなら、能動態は無標(再帰代名詞も迂言構文も屈折語尾も不定人称も接尾辞の付加もおこらない)であって、そこになんらかの標識を加えることで中動態や受動態が表現されるからで

ある。

繰り返すが、柴谷の説明はたいへん優れている。しかし私がワイトゲンシユタインだったら、こう言いたい気持ちに駆られる。

私の手があがるとき、「私が手をあげる」。ここに一つの問題が現れる。私の手があがることを、私が手をあげることにするとき、そこに何が付け足されているのか？

付け足されているものは、ワイトゲンシユタインが探しているものと同じである。しかし、ここにおいては自動詞が基本であり、他動詞がそこから派生してくる。動作主は後から付け足されている。いわば意思の獲得である。例えば、津波が起こる。人々や家々が無慈悲に押し流されてゆく。それはブレート（ブレイト）の歪みが解放されたという、ただただそれだけのことであるが、「天が罰しているのだ」という意思を付け足そうとした政治家を私たちは知っている。

〈できごと〉に意思はない。しかし意思に満ちている。この神話的思考の裡に、私はもう一度中動態を考察する必要があるのである。

参考文献一覧

- C.N. Li, S. A. Thompson 1976 "Subject and Topic: A New Typology of Language"
P. J. Hopper, S. A. Thompson 1980 "Transitivity in Grammar and

"Discourse"

- 三上章 1960 『象は鼻が長い』
Y. Sato, C. Kim 2010 "Radical Pro drop and the Role of Syntactic Agreement in Colloquial Singapore English"
保坂道雄 2014 『文法化する英語』
縄田裕幸 2012 「古英語・中英語における「空主語」の認可と消失」
綿貫陽, マーク・ピーターセン 2006 『表現のための実践ロイヤル英文法』
庵功雄 2013 「公文書書き換えコーパスの統語論的分析…受身を中心に」
エミール・バンヴェニスト 1983 『一般言語学の諸問題』
金谷武洋 1998 『日本語に主語はいらない』
金谷武洋 2002 「日本語主語再論: タイポロジーと印欧語古典文法への寄与」
原沢伊都夫 2012 『日本人のための日本語文法入門』
渡辺実 1996 『日本語概説』
國分巧一郎 2017 『中動態の世界 意思と責任の考古学』
中尾俊夫, 児島修 1990 『歴史的にさぐる現代の英文法』
安藤貞雄 2002 『英語史入門 現代英文法のルーツを探る』
池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』
角田太作 1986 「能格言語と対格言語におけるトピック性」
角田太作 1992 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語』
角田太作 2003 「オーストラリア原住民語のヴォイス」
M. Shibagatani 1985 "Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis"
柴谷方良 1986 「能格性をめぐる諸問題」

- 柴谷方良 1997 「言語の機能と構造と類型」
- 陳陸琴 2015 「中国語と日本語「第三者の受身文」の対照研究…述語動詞と結果的影響について」
- 石村広 2005 「類型特徴から見た中国語の受動文」
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』
- 東郷雄二 1994 「受動態と非人称の transitivity system — 日仏対照研究へ向けて—」
- 青山和輝 2015 「トルコ語の非人称受身の成立条件」
- 佐藤知己 1995 「アイヌ語の受動文に関する一考察」
- 正保勇 1986 「受動構文に関する一考察…日本語とインドネシア語との比較」
- 秋元実晴 2002 『増補 文法化とイディオム化』
- 井口容子 2005 「受動的代名動詞再考…叙述の類型とアスペクト」
- 細江逸記 1928 「我が国語の動詞の相 (Voice) を論じ、動詞の活用形式の分岐するに至りし原理に及ぶ」

執筆にあたって、日本語や英語以外にも様々な言語を考察に含めたが、その際 google 翻訳に引っこんであたりをつけるなどした。簡単な文についてはインフォーマントもやってもらった。ここに重ねて google 先生に厚く感謝を申し上げる次第である。

非思想非非思想天 第十二号

発効日 : 2017 年 11 月 23 日
発行者 : 京都大学哲学研究会
Mail : kyototekken@gmail.com
Twitter : [@kyototekken](https://twitter.com/kyototekken)
Web : <http://sites.google.com/site/kyototekken2011/>